氷見市埋蔵文化財調査報告第17冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ

１９９４年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９５年３月

氷見市埋蔵文化財調査報告第17冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ

１９９４年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９５年３月

序

富山湾に面し海の幸，山の幸に恵まれた氷見市は，古くより人々の生活の場として，数多くの文化遺産を育み，守ってきました。

特に，大正７年に調査された大境洞窟は，日本で最初の洞窟遺跡調査として，同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として，学史にその名を留め，国指定史跡になっております。

しかしながら，近年，生活の豊かさ，利便さを求めて開発が進められる一方で，これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては，文化遺産保護のため，市内全域の詳細分布調査を実施することにより，より充実した遺跡地図を作成することにし，昨年から調査を開始いたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは，真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに，調査の実施及び報告書の作成にあたり，ご協力いただきました地元の方々，またご援助いただきました富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚くお礼申し上げます。

平成７年３月

氷見市教育委員会
教育長　江　幡　　武

例　　言

1　本書は，富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第2年度（1994年度）の報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学人文学部考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，氷見市教育委員会生涯学習課学芸員大野 究と富山大学考古学研究室の全員が協力して行った。

4　本文は，前川 要（富山大学人文学部助教授），大野 究，新本真之・長谷川幸志・石内詩保・稲石純子・岩崎誉尋・内田亜希子・大川 進・大平奈央子・景山和也・近藤美紀・匂坂友秋・塩田明弘・滝 寿美代・坪田聡子・古沢亜希子・堀内大介・三林健一・米出敬子・芳賀真理子（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付けた。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。

7　採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保存公開している。

8　編集は宇野隆夫（富山大学人文学部教授）前川 要・大野 究の指導の下に新本真之・長谷川幸志がおこなった。

目　　次

第１章　はじめに…… 1

1　調査の目的…… 1

2　調査の経過…… 1

3　氷見市の地勢と自然環境…… 2

4　1994年度調査区の地勢と地区割…… 4

第２章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物…… 7

(1)　稲積川口遺跡…… 7
(2)　高塚遺跡…… 7
(3)　木谷城…… 7
(4)　加納蛭子山古墳群…… 7
(5)　加納横穴群…… 7
(6)　稲積三ツ屋前遺跡…… 7
(7)　稲積三屋野遺跡…… 8
(8)　加納金宮遺跡…… 8
(9)　柿谷大口遺跡…… 8
(10)　柿谷土谷山遺跡…… 8
(11)　七分一遺跡…… 8
(12)　七分一Ｂ遺跡…… 8
(13)　加納中程遺跡…… 9
(14)　加納桜打遺跡…… 9
(15)　諏訪野Ｂ遺跡…… 9
(16)　諏訪野Ａ遺跡…… 9
(17)　唐島遺跡……10
(18)　泉横山遺跡……10
(19)　領毛Ａ遺跡……10
(20)　領毛Ｂ遺跡……10
(21)　泉古墳群……10
(22)　泉Ａ遺跡……11
(23)　泉Ｃ遺跡……11
(24)　泉Ｂ遺跡……11
(25)　大野沢遺跡……11
(26)　鞍川金谷遺跡……12
(27)　鞍川Ａ中世墓群……12
(28)　鞍川Ｄ遺跡……12
(29)　鞍川Ｃ遺跡……13
(30)　鞍川諏訪社遺跡……13
(31)　鞍川Ｂ中世墓群……13
(32)　鞍川寺田遺跡……13
(33)　朝日山砦……13
(34)　七軒町遺跡……13
(35)　蓮乗寺中世墓群……13
(36)　比美浜遺跡……13
(37)　上田Ａ遺跡……14
(38)　上田Ｆ遺跡……14
(39)　上田Ｂ遺跡……14
(40)　千久里城……14

(41) 竹里山岩屋……14
(42) 大野南遺跡……15
(43) 泉中尾廃寺……15
(44) 中尾坊田遺跡……15
(45) 中尾新保谷内遺跡……16
(46) 沖布Ｂ遺跡……17
(47) 糖塚南遺跡……17
(48) 沖布Ｃ遺跡……17
(49) 沖布Ａ遺跡……18
(50) 鞍川横羽毛遺跡……18
(51) 朝日谷内横穴……18
(52) 上日寺中世墓群……18
(53) 朝日長山古墳……19
(54) 朝日水源地遺跡……19
(55) 朝日十字路遺跡……19
(56) 朝日貝塚……19
(57) 朝日潟山古墳群……23
(58) 朝日橋詰遺跡……24
(59) 御座町遺跡……24
(60) 岩上遺跡……24
(61) 伊勢玉神社中世墓群……25
(62) 中尾ガメ山遺跡……25
(63) 中尾山田遺跡……26
(64) 中尾横穴群……26
(65) 荒館Ａ遺跡……26
(66) 湊川中の橋付近石造物出土地…26
(67) その他の採集遺物……26

2　遺物の散布状況……28

(1) 縄紋時代遺物の散布状況……28
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状況…28
(3) 古代遺物の散布状況……35
(4) 中世遺物の散布状況……35
(5) 近世遺物の散布状況……35
(6) 小結……35

第３章　おわりに……37

参考文献……39

図　版　目　次

関連頁

図版１　Ｂ地区航空写真(1)……1947年撮影……１～４
図版２　Ｂ地区航空写真(2)……1992年撮影……１～４
図版３　遺物実測図(1)……大川作成……７～27
図版４　遺物実測図(2)……古沢作成……７～27
図版５　遺物実測図(3)……大平作成……７～27
図版６　遺物写真(1)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版７　遺物写真(2)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版８　遺物写真(3)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版９　遺物写真(4)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版10　遺物写真(5)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版11　遺物写真(6)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版12　遺物写真(7)……前川・新本・長谷川撮影……７～27
図版13　Ｂ地区の遺跡と遺物の採集地点Ⅰ……岩崎・近藤・三林作成……７～27
図版14　Ｂ地区の遺跡と遺物の採集地点Ⅱ……岩崎・近藤・三林作成……７～27
図版15　Ｂ地区の遺跡と遺物の採集地点Ⅲ……岩崎・近藤・三林作成……７～27
図版16　Ｂ地区の遺跡と遺物の採集地点Ⅳ……岩崎・近藤・三林作成……７～27

挿　図　目　次

第１図　氷見市の地勢と地区割……長谷川作成……３
第２図　Ｂ地区の地形……岩崎・近藤・三林作成……５
第３図　Ｂ地区の地区割……稲石・内田・米出作成……６
第４図　Ｂ地区図……稲石・内田・米出作成……29
第５図　Ｂ地区縄紋時代遺物の散布状況……稲石・内田・米出作成……30
第６図　Ｂ地区弥生・古墳時代遺物の散布状況……稲石・内田・米出作成……31
第７図　Ｂ地区古代遺物の散布状況……稲石・内田・米出作成……32
第８図　Ｂ地区中世遺物の散布状況……稲石・内田・米出作成……33
第９図　Ｂ地区近世遺物の散布状況……稲石・内田・米出作成……34
第10図　Ｂ地区の遺跡の位置……新本作成……36

第１章　はじめに

１　調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約１万年前，上庄川上流域の丘陵においてである。以後，遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し，現在に至るまで連綿と人々の営みが続いたと思われる。

氷見市の遺跡の数は，大正７年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後，昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83個所，昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143個所と，年々増加してきている。

しかし，これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく，その範囲・時期などについて不明な点が多く，また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

２　調査の経過

このような状況のもと，氷見市では平成４年度からスタートする第６次総合計画の主要施策のひとつとして，「指定文化財の再調査はもとより，指定以外の文化財，埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め，活力ある文化財として，郷土の歴史的遺産の保護・顕彰を図る」ことをあげ，主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では，平成４年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図』［第２版］を発行し，234個所の遺跡を登録した。

さらに平成５年度からは，この遺跡地図をさらに充実させるため，国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては，氷見市教育委員会を中心とし，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て，下記の調査団を編成した。

調査の方針としては，市域の平野部全体を調査対象とし，７個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し，最終的にはより充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は，Ｂ地区について（第１図），1994年４月17日～５月８日までの間，計６日間，延170余人の参加を得て，実施した。

氷見市埋蔵文化財分布調査団

団　　長：江幡　　武　（氷見市教育委員会教育長）

調　査　員：宇野　隆夫　（富山大学人文学部教授）

前川　　要　（富山大学人文学部助教授）

大野　　究　（氷見市立博物館・氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

鈴木　瑞麿　（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員：鈴木　和子・新本　真之・長谷川幸志（富山大学大学院人文科学研究科学生）

大野　淳也・野川　裕二・大泰司　統・大高　政史・大平　愛子・尾野寺克実

河合　　忍・佐藤　聖子・武田　昌明・中田　書矢・野中由希子・福海　貴子

松原　和也・鶴松　　普・石内　詩保・稲石　純子・岩崎　誉尋・内田亜希子

大川　　進・大平奈央子・景山　和也・近藤　美紀・匂坂　友秋・塩田　明弘

滝　寿美代・坪田　聡子・古沢亜希子・堀内　大介・三林　健一・米出　敬子

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：石井　淳平・井手口恵美・海道　雅子・工藤　直子・小林　香織・田中慎太郎

田中　幸生・中島　義人・中谷　正和・平井　晶子・藤田　良子・古屋　聡洋

松本　　茂・宮崎順一朗・向井　裕知・本村　　徹・山崎　雅恵

（富山大学人文学部考古学研究室学生）

高橋　浩二・角田　隆志・大知　正枝・小野木　学・海道　順子・榊原　滋高

島崎　久恵・中村　大介・松田　留美・松山　温代・宮田　　明・柳沼　弥生

（元富山大学人文学部考古学研究室学生）

事　務　局：島　　勝彦　（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

山岸　啓次　（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）

西井　紀夫　（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

浦　　勇仁　（氷見市教育委員会生涯学習課社会教育主事）

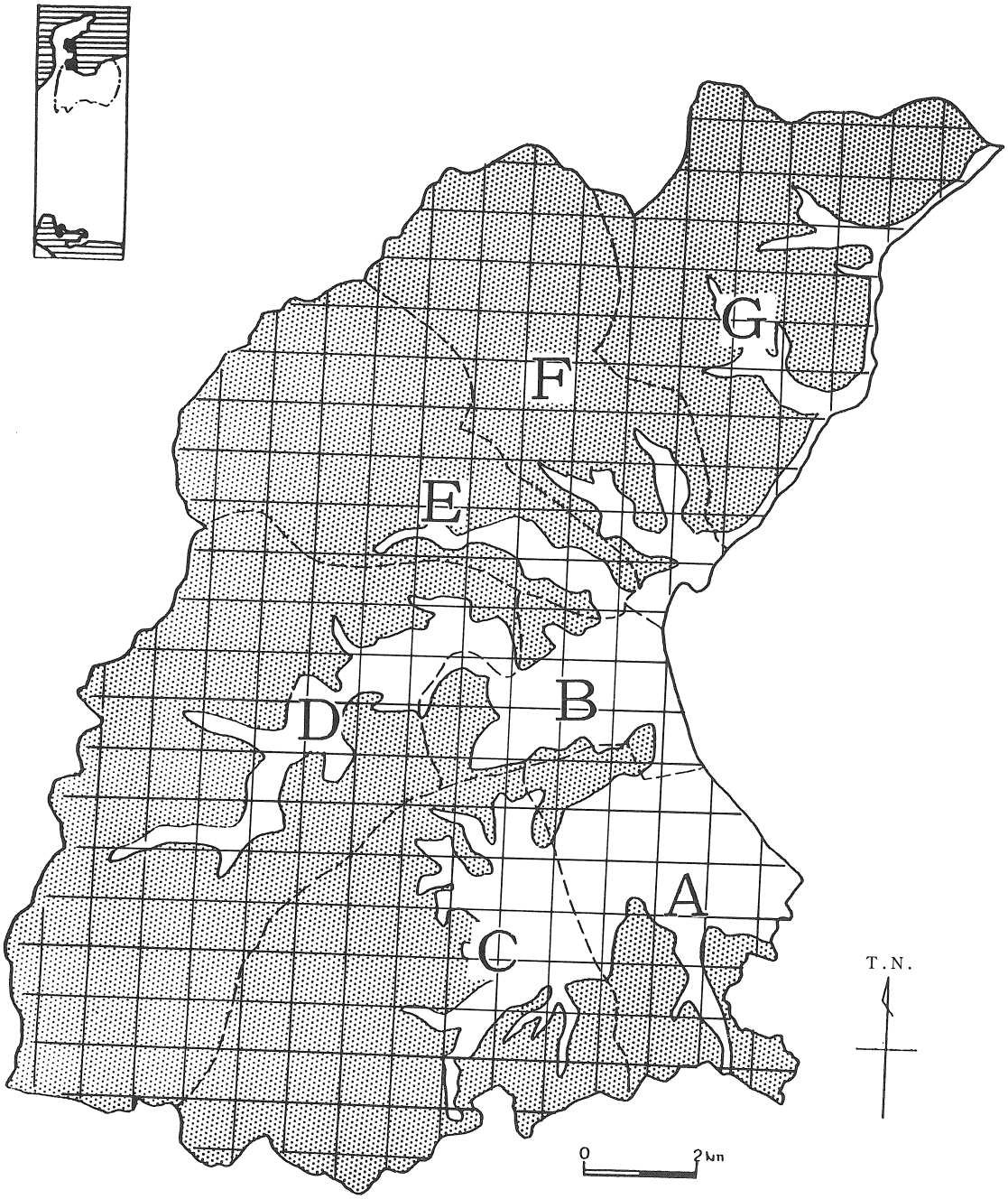
高野　弘文　（氷見市教育委員会生涯学習課社会教育主事）

宮下　和子　（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

3　氷見市の地勢と自然環境

氷見市は，富山県の西北部に位置し，能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに，太田村を除く氷見郡１町17村が合併し，現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢，人口は約６万１千人である（第１図）。

市域は，北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ，東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り，山間部では地すべりが多い。市北半部は，上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり，上庄川流



A地区 1993年度調査地区
B地区 1994年度調査地区
C地区 1995年度調査予定地区
D地区 1996年度調査予定地区
E地区 1997年度調査予定地区
F地区 1998年度調査予定地区
G地区 1999年度調査予定地区

第1図 氷見市の地勢と地区割

(国土座標 X＝138°59′55″ Y＝35°48′を基準として)

域以外は，まとまった平野が少ない。市南半部は，かつてラグーンであった平野と，その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は，海岸線のほぼ中央に位置し，近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶJR氷見線が通り，主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と，富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は，稲作を中心とした農業と，ブリ定置網に代表される漁業であるが，近年は第二・三次産業就業者が多く，高岡市などの市外へ通勤する人が多い。

一方，能登の観光地として，市内には旅館・民宿が立ち並び，近年は温泉も市内各地で噴出している。

4　1994年度調査区の地勢と地区割

今回の調査地区は，市街地と上庄川下流域である。調査は踏査によるものとし，対象は平野部と丘陵部の農地とした（図版1・2）。

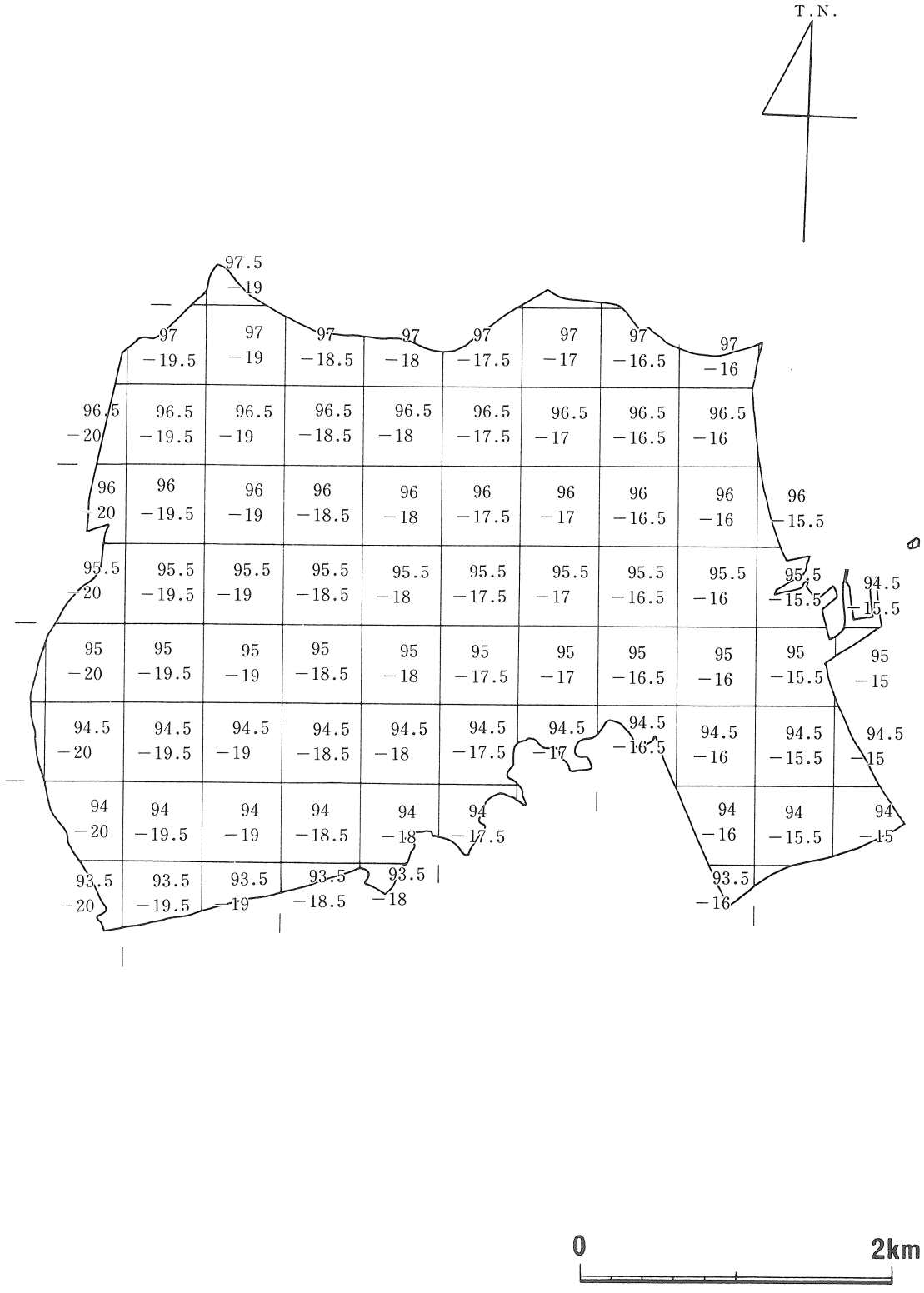
市街地の調査は，踏査できる範囲がかなり限定されるため，成果が少ないと思われるが，宅地間のわずかな農地の状況から，氷見町の成立と変遷をうかがえる資料が得られる可能性があろう。また，ここには国指定史跡朝日貝塚があり，表採状況から遺跡の範囲を推定する材料が得られると思われる。

一方，上庄川下流域は，周囲の丘陵に古墳が多数確認されているが，平野部の様相は不明である。特に中尾地区は将来能越自動車道のインターチェンジの建設が予定されており，大規模な開発が増加すると思われ，今回の成果が今後の重要な基礎資料と成り得るであろう。

現地調査は，調査区を地形，道路，水路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿った一辺500ｍの方眼を単位として集計し（第3図），時期別の採集遺物量を図示して，遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第5～9図）。

（大野　究）

第2図　B地区の地形（縮尺1/20,000）



第3図　B地区の地区割(国土座標　X＝138°59′55″　Y＝35°48′を基準とし500m四方の方眼を組んだもの，縮尺1/40,000)

第２章　分布調査の成果

１　遺跡と採集遺物

⑴　稲積川口遺跡　（図版13の１）　氷見市稲積1041他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。余川川の河口より約１㎞遡った南岸平坦部に位置し，北に余川川が流れる。現在は，水田と住宅地として利用されている。

今回採集した遺物は須恵器４片である。このうち２片を図示した（図版３の１～２）。

１は須恵器の杯身Ｂ類の底部である。底径は約８㎝を測る。９～10世紀代のものと考えられる。胎土は密であり，焼成は還元硬質である。

２は須恵器の杯身の口縁部から体部上半であり，内外面共に横撫で調整を施す。口径は約12㎝を測る。胎土は密であり，青灰色を呈す。焼成は還元硬質である。

⑵　高塚遺跡　（図版14の２）　氷見市余川字片畑地内

上庄川北側の丘陵頂部に本遺跡は立地する。標高は約130ｍを測る。径10ｍほどの広がりをもつ。この丘陵は城址伝承地とされているが，今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑶　木谷城　（図版13・14の３）　氷見市稲積字木谷地内

上庄川北部の河口より約3.8㎞遡った，上庄川が蛇行する地点の北岸丘陵頂部（約108ｍ）から斜面中腹にかけて立地する。遺跡の広がりは，南北約300ｍ，東西約250ｍである。今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑷　加納蛭子山古墳群　（図版13の４）　氷見市加納字蛭子地内

氷見市の市街地から北西４㎞余り，上庄川と余川川との間の丘陵東端に蛭子山がある。古墳群はこの蛭子山の中腹から山頂にかけて立地している。標高は約40ｍ～68ｍを測る。円墳が５基確認されており，１号墳は径30ｍ，高さ4.0ｍ，２号墳は径10ｍ，高さ1.0ｍ，３号墳は径30ｍ，高さ3.5ｍである。４号墳と５号墳は共に径10ｍ，高さ1.0ｍであり，全長20ｍの前方後円墳ではないかと考えられている。今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑸　加納横穴群　（図版13の５）　氷見市加納字蛭子地内

加納横穴群は，加納蛭子山古墳群が立地する蛭子山の南側を中心とした斜面中腹から裾部にかけて所在する。標高は約10ｍ～40ｍを測る。今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑹　稲積三ツ屋前遺跡　（図版13の６）　氷見市稲積字三ツ屋前地内

余川川河口より約200ｍ南の平坦地に立地する遺跡である。現在は住宅地として利用されている。北東から南西に150ｍ，北西から南東に75ｍほどの広がりをもつ。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(7) **稲積三屋野遺跡**（いなづみみつやの）　（図版13の７）　氷見市栄町10

稲積三ツ屋前遺跡の南側にほぼ接するように位置している。南北に100ｍ，東西に75ｍほどの広がりをもつ。現在は畑，樹木畑，住宅地として利用されている。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(8) **加納金宮遺跡**（かのうかなみや）　（図版13の８）　氷見市栄町18

余川川，上庄川に挟まれた河口付近の平坦地のほぼ中央，余川川から南へ約600ｍ，上庄川から北へ約700ｍのところに位置する。現在は，遺跡内に金宮神社が所在し，その他の部分は水田として利用されている。

採集した遺物は土師器，須恵器，珠洲，越中瀬戸，中国青磁，中国青花がそれぞれ１片，計６片である。このうち２片を図示した（図版３の３～４）。

３は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約12㎝を測り，色調は灰色である。胎土は緻密であり，焼成は還元硬質である。

４は中国製青磁の皿の底部である。見込みに花紋を陰刻する。胎土は密であり，焼成は良好である。

(9) **柿谷大口遺跡**（かきなやおおぐち）　（図版14の９）　氷見市柿谷1669他

高塚遺跡のある丘陵の南西裾部にある平坦地に位置する。標高は約８～10ｍほどで，約400ｍ南には上庄川が流れる。現在は水田として利用されている。

採集した遺物は，珠洲１片，伊万里１片の計２片である。このうち１片を図示した（図版３の５）。

５は珠洲の甕である。外面に３㎝幅に９条の叩き目，内面に撫で調整を施す。色調は灰白色を呈する。胎土は密であり，焼成は還元硬質である。

(10) **柿谷土谷山古墳群**（かきなやつちやのやま）　（図版14の10）　氷見市柿谷地内

高塚遺跡のある丘陵から南西に延びる斜面に位置し、標高は約30ｍ～80ｍを測る。約400ｍ南には上庄川が流れる。現在は，標高約30ｍ～約50ｍは水田，畑として利用され，標高約50ｍ～約80ｍは利用されていない土地と針葉樹の森林で構成されている。径20ｍの円墳が１基確認されており，通称丸山古墳と呼ばれる。明治40年，開墾中に直刀２，鉄鏃数十，土器片多数が出土している。周辺にはこの他にも数基の古墳があったらしいが，現在は消滅している。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(11) **七分一遺跡**（しちぶいち）　（図版14の11）　氷見市七分一地内

上庄川の河口より約６㎞遡った一帯は七分一といわれる。この上庄川北岸にある丘陵の西側斜面に本遺跡は立地している。遺跡の広がりは南北約250ｍ，東西約100ｍである。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(12) **七分一Ｂ遺跡**（しちぶいち）　（図版14の12）　氷見市七分一732他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。前述した七分一遺跡の南約60ｍにある丘陵裾部に

立地している。本遺跡の150ｍほど南には上庄川が流れる。現在は住宅，水田，畑として利用されている。

採集した遺物は，須恵器１片，珠洲１片の計２片である（図版３の６，図版５の139）。

６は須恵器の杯身Ｂ類の底部である。底径は約９㎝を測る。内外面に撫で調整を施す。色調は青灰色を呈する。胎土は密であり，焼成は還元硬質である。

139は珠洲の擂鉢の底部である。底径は約11㎝を測る。内面に撫でを施す。色調は青灰色を呈する。胎土は密であり，石英を含む。焼成は還元硬質である。　（芳賀万里子）

⒀　加納中程（かのうなかほど）経塚　（図版14の13）　氷見市加納字谷内地内

七分一の東方一帯は加納と呼ばれるところである。本遺跡はこの加納西方にある丘陵の北側先端部の中腹（標高約30～54ｍ）に位置し，西側に加納大池を望む。今回の調査では遺物を採集できなかった。

⒁　加納桜打（かのうさくらうち）遺跡　（図版13の14）　氷見市加納字谷内地内

上庄川の河口より約2.4㎞遡った下流域氾濫源付近から，北へおよそ150ｍ行った平坦地に本遺跡は位置する。遺跡は径160ｍ内外の範囲に広がる。今回の調査では遺物を確認できなかった。

⒂　諏訪野（すわの）Ｂ遺跡　（図版13の15）　氷見市諏訪野11他

上庄川の下流域北岸一帯には諏訪野と呼ばれる集落がある。本遺跡はこの集落の北西に位置する。南東側には，諏訪野Ａ遺跡が接している。東西約560ｍ，南北約360ｍに広がりをもっている。以前より中世の遺跡として知られている。今回の調査では，土師器と須恵器片を多数，珠洲２片，伊万里１片を採集した。そのうち５片を図示した（図版３の７～11）。

７は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約13㎝を測る。内外面ともに撫で調整を施す。胎土は密で灰褐色を呈し，焼成は還元硬質である。

８は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約14㎝を測る。内外面ともに撫で調整を施す。胎土は密で灰黄色を呈し，焼成は還元硬質である。

９は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約14㎝を測る。内外面ともに撫で調整を施す。胎土は密で淡黄灰色を呈し，焼成は還元硬質である。

10は珠洲の擂鉢の口縁部である。口径約20㎝を測る。胎土は密で，色調は黄褐色を呈する。焼成は不良で生焼けの状態であり，酸化軟質である。

11は伊万里の椀の口縁部から体部上半である。18世紀後葉のものと考えられ，口径は約12㎝を測る。内面には２条の圏線を施し，外面には，円形の図柄が染付けられる。胎土は密で黄灰色を呈する。

⒃　諏訪野（すわの）Ａ遺跡　（図版13の16）　氷見市諏訪野2他

前述した諏訪野集落のほぼ中央に位置する遺跡である。諏訪野Ｂ遺跡の南東側に接し，上庄川下流域に立地する遺跡である。東西約160ｍ，南北径260ｍに広がり，現在では全域にわたって住宅地として利用されている。以前より古代の遺跡として知られ，土師器が採集されている

が，今回の調査では遺物は採集できなかった。

⑰ **唐島遺跡**　（図版13の17）　氷見市中央町（氷見漁港沖）

本遺跡は，氷見漁港から北東へおよそ700ｍのところにある，有磯海沖合の島，唐島に所在する。径およそ100ｍを測り，ほぼ島の全周に広がる。従来より中・近世の遺跡として知られ以前に土師器が検出されたが，今回調査しなかった。

⑱ **泉横山遺跡**　（図版14の18）　氷見市泉136他

今回の調査で新たに発見した遺跡である。千久里山山頂から北側に延びる丘陵の北端部は舌状を呈している。この周辺一帯を泉というが，本遺跡は，この舌状丘陵の西に接した平坦地に位置し，東西約200ｍ，南北約250ｍに広がっている。南側は泉古墳群，南西側は領毛Ａ遺跡に接する。今回の調査では須恵器15片，越中瀬戸１片，不明陶器３片の計19片を採集した。このうち２片を図示した（図版３の12・13）。

12は須恵器杯身Ａ類の底部である。底径は約13㎝を測る。内面と外面体部に横撫で調整が見られる。胎土は密で青灰色を呈し，焼成は還元硬質である。

13は須恵器の杯蓋の口縁部である。口径は約16㎝を測る。内面，外面ともに横撫で調整を施す。胎土は密で色調は青灰色を呈し，焼成は還元硬質である。

⑲ **領毛Ａ遺跡**　（図版14の19）　氷見市泉字領毛地内

泉横山遺跡の南西側丘陵に位置する遺跡である。千久里山山頂より北に派生する丘陵の最北端部の頂部に東西約90ｍ，南北約150ｍにわたって広がる。以前より縄紋時代から古墳時代の遺跡として知られ，石器，土師器，須恵器が採集されたが，今回の調査では遺物を確認できなかった。

⑳ **領毛Ｂ遺跡**　（図版14の20）　氷見市泉字領毛地内

千久里山山頂から北へ延びる丘陵の先端部は北向きに弧状を呈し，Ｙ字状になる。本遺跡は，この弧状中央部の斜面中腹に位置する。標高は約20～50ｍを測る。領毛Ａ遺跡の東南およそ280ｍの場所にある。付近一帯は泉古墳群であり，泉古墳群の遺物散布地でもある。この遺跡は，以前より古墳時代の遺跡として知られ，土師器，須恵器が採集されているが，今回の調査では遺物を確認できなかった。

㉑ **泉古墳群**　（図版14・15の21）　氷見市泉字領毛地内

本古墳群は，千久里山山頂から北に伸びる丘陵先端のほぼ全域にあたり，領毛Ａ，領毛Ｂ遺跡はこの中に含まれている。この古墳群には20基以上の古墳があり，このうち鶴塚，鶏塚，猫塚の３基が大正年間に発掘された。鶴塚は丘陵端部にある円墳で，径15ｍ，高さ1.5ｍを測る。人骨１，勾玉数個，小玉30個，直刀２本，土器３片が出土した。鶏塚は丘陵に存在する方墳で，規模は11.5ｍ×12.5ｍ，高さ２ｍである。出土した遺物には，切子玉１個，管玉２個，小玉５個がある。猫塚は丘陵部に位置する方墳で，規模の詳細は不明である。

(22) **泉（いずみ）A遺跡**　（図版15の22）　氷見市泉字住易地内

千久里山山頂から延びる丘陵には，北東に派生するものがある。この丘陵のひとつ，泉に最も近い丘陵の先端部に接する平坦地に本遺跡は立地する。範囲は，およそ100ｍ四方にわたって広がっており，北東約40ｍには八幡宮がある。古代の遺跡として，須恵器が採集されたが，今回の調査では遺物を確認できなかった。

(23) **泉（いずみ）C遺跡**　（図版15の23）　氷見市泉字住易地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。千久里山山頂から延びる丘陵には，北東に派生するものがある。本遺跡はこの丘陵の先端に接する平坦地に位置する。径200ｍ内外にひろがっており，北東約300ｍには大野沢遺跡，南約170ｍには泉Ｂ遺跡がある。今回採集した遺物には須恵器12片，土師器８片，伊万里４片，磁器７片，陶器７片，不明陶器３片，石器１片の計42片を採集した。このうち５片を図示した（図版３の14～18）。

14は須恵器の甕である。外面には３㎝幅に18本の叩き目が見られ，内面には当て具痕が見られる。胎土は密で色調は灰色を呈し，焼成は還元硬質である。

15は須恵器の杯蓋の口縁部から体部にかけての部分である。口径は約17㎝を測る。内外面ともに撫で調整が施されている。色調は灰色で，胎土はやや粗で砂粒を含み，焼成は還元硬質である。

16は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約13㎝を測る。内外面ともに撫で調整が施されている。胎土は密で色調は灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

17は須恵器の杯身の口縁部である。口径は12㎝を測る。内外面ともに横撫で調整が施されている。胎土はやや粗で砂粒を含み，色調は灰色である。焼成は還元硬質である。

18は両面調整の槍先形尖頭器の基部である。現長は約３㎝，断面形は，ほぼ整った凸レンズ状であり，基部付近で上半部が欠損している。石質は安山岩である。

(24) **泉（いずみ）B遺跡**　（図版15の24）　氷見市泉字住易地内

泉Ｃ遺跡の南およそ170ｍの地点に本遺跡は位置する。千久里山山頂から東に派生する丘陵の先端に接する平坦部に位置する遺跡である。東西約130ｍ，南北約60ｍにわたって広がる。以前より古代から中世の遺跡として知られ，須恵器，珠洲が採集されたが，今回の調査では遺物を確認できなかった。　（匂坂　友秋）

(25) **大野沢（おおのさわ）遺跡**　（図版15の25）　氷見市大野（沢）地内

千久里山山頂から北に派生する丘陵の東側，泉Ａ遺跡から東へ約500ｍの地点に立地する縄紋時代・古代の遺跡である。本遺跡は径約140ｍにわたって分布し，標高はおよそ７ｍを測る。これまでに縄紋時代の石斧，古代の土師器，須恵器が採集されているが，詳細は不明である。今回の調査では，須恵器２片，珠洲１片，伊万里２片，唐津１片，不明陶器１片，計７片を採集した。そのうち２片を図示した（図版３の19～20）。

19は須恵器の杯蓋の口縁部である。口径は約16㎝を測る。内外面共に轆轤撫で調整が施され

る。胎土は密で，色調は青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

20は須恵器杯身Ｂ類の底部である。底径は約６㎝を測る。外面に轆轤撫で調整が施される。内面は剝離しており，調整は不明である。胎土はやや粗く１㎜前後の白色粒を含み，色調は灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(26) 鞍川金谷遺跡　（図版16の26）　氷見市鞍川191他

上庄川の河口より約2.4㎞遡った，上庄川流域氾濫源付近の南側平坦地に立地する縄紋時代中期～古墳時代の遺跡である。本遺跡は東西約350ｍ，南北約100ｍにわたって分布し，標高はおよそ４ｍを測る。これまでに縄紋土器，弥生土器，土師器，須恵器が採集されているが，詳細は不明である。今回の調査では石器１片，縄紋土器１片，弥生土器39片，土師器16片，須恵器６片，近世陶器６片，計69片を採集した。そのうち５片を図示した（図版３の21～25）。

21は土師器広口壷の口縁部である。口径は約27㎝を測る。内外面共に横撫で調整痕が認められる。器壁は厚く，９㎜前後である。胎土には石英や長石の小片が認められ，色調は赤褐色を呈する。焼成は酸化軟質，良好である。

22は土師器長胴甕の口縁部である。口径は約24㎝を測る。口縁部は撫で調整により丸く仕上げてある。胎土には石英が少量混じっており，色調は黄褐色を呈する。焼成は酸化軟質，良好である。

23は土師器甕の口縁部である。口径は約15㎝を測る。頚部の内面に籾ガラ痕を残している。胎土には石英，長石を含み，色調は黄褐色を呈する。焼成は酸化軟質，良好である。

24は土師器の底部である。器種は不明である。底径は約５㎝を測り，外面に横撫で調整痕が認められる。胎土には石英，長石を少量含み，色調は黄褐色を呈する。焼成は酸化軟質，良好である。

25は石核である。石質は黒曜石である。節理のため剝離は一定ではなく，原石の面を残す。

(27) 鞍川Ａ中世墓群　（図版16の27）　氷見市鞍川348他

上庄川の河口より2.5㎞遡った地点より南方約600ｍのところに鞍川集落がある。この集落のほぼ中央に本遺跡は立地する。本遺跡は径約60ｍにわたって分布し，標高は約５ｍを測る。今までに珠洲が採集されているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を確認できなかった。

(28) 鞍川Ｄ遺跡　（図版16の28）　氷見市鞍川638他

今回の調査で新たに発見された中世の遺跡である。前述の鞍川集落の南方に広がる水田に立地する。本遺跡は径約80ｍにわたって分布し，標高は約４ｍを測る。今回の調査では，須恵器２片，珠洲２片，越中瀬戸１片，瀬戸１片，近世陶器１片，不明陶器１片，不明磁器１片，計９片を採集した。そのうち２片を図示した（図版３の26～27）。

26は須恵器壷の口縁部である。口径は約14㎝を測る。内外面共に轆轤撫で調整が施される。胎土は密で，色調は明灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

27は珠洲である。器種は不明である。内外面共に轆轤撫で調整が施される。胎土は密であり，

黒灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(29) 鞍川（くらかわ）C遺跡　（図版16の29）　氷見市鞍川304

上庄川の河口より約2.2㎞遡った地点の南方約500ｍに本遺跡は立地する。鞍川Ａ中世墓の東約250ｍに位置する中世の遺跡である。本遺跡は径約80ｍにわたって分布し，標高は約３ｍを測る。今までに中世土師器が発見されているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を確認できなかった。

(30) 鞍川諏訪社（くらかわすわしや）遺跡　（図版16の30）　氷見市鞍川197他

本遺跡は，前述の鞍川集落の南東のはずれに立地する中世の遺跡である。北東150ｍには浄専寺がある。本遺跡は径約60ｍにわたって分布し，標高は約３ｍを測る。これまでに珠洲が発見されているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を確認できなかった。

(31) 鞍川（くらかわ）Ｂ中世墓群　（図版16の31）　氷見市鞍川683

上庄川の河口より約2.1㎞遡った地点から南へ約900ｍのところにある遺跡で，前述した鞍川Ａ中世墓の南東約350ｍ，鞍川諏訪社遺跡の南西約100ｍに位置する。本遺跡は径60ｍにわたって分布し，標高は約３ｍを測る。これまでに珠洲が採集されているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を確認できなかった。

(32) 鞍川寺田（くらかわてらだ）遺跡　（図版16の32）　氷見市鞍川通称寺田（光明寺千場）718他

南方に朝日山丘陵をひかえた有磯高校の校庭に所在する縄紋時代後期の遺跡である。標高は約５ｍを測る。昭和37年の春，校庭拡張のための工事中に発見され，現在は当時出土した縄紋土器が有磯高校に保管されている。今回の調査では，遺物は確認できなかった。

(33) 朝日山（あさひやま）砦　（図版16の33）　氷見市幸町地内

朝日山丘陵の北西約350ｍ，氷見高校の北方約300ｍのところにある丘陵に立地する中世の砦跡である。本遺跡は東西約350ｍ，南北約150ｍにわたって分布し，標高は約35ｍを測る。今回の調査では遺物を確認できなかった。

(34) 七軒町（しちけんまち）遺跡　（図版16の34）　氷見市幸町19

朝日山丘陵の北方約300ｍ，上庄川の河口より約800ｍ遡った地点の南方約500ｍに立地する縄紋時代の遺跡である。本遺跡は東西約250ｍ，南北約100ｍにわたって分布し，標高は約２ｍを測る。今までに縄紋土器が採集されているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を確認できなかった。

（景山和也）

(35) 蓮乗寺（れんじようじ）中世墓群　（図版16の35）　氷見市朝日本町4

本遺跡は南西に上日寺中世墓群を望み，西方を朝日山山頂から東に派生する丘陵に接している。標高は約2.9ｍを測る。従来より中世の遺跡として知られ，急傾斜工事で珠洲，五輪搭，板碑が出土している。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(36) 比美浜（ひみはま）遺跡　（図版16の36）　氷見市比美町地内

本遺跡は北は氷見港に接し，南に湊川を望む比美浜の砂丘上に立地する遺跡である。標高は

約1.7ｍを測る。従来より二次的散布地として知られていた。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(37) 上田（うわだ）Ａ遺跡　（図版15の37）　氷見市上田地内

本遺跡は西に長林寺を望み，竹里山山頂から西に派生する丘陵に挟まれた谷に位置し，楕円形状の広がりを持つ。標高は約16.5ｍを測る。従来より古代の遺跡として知られ，須恵器が採集されている。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(38) 上田（うわだ）Ｆ遺跡　（図版15の38）　氷見市上田地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。竹里山山頂から西に派生する丘陵を東に望む平坦地に，楕円形を呈して位置する。東西に約100ｍ，南北200ｍにわたって広がる。標高は約12.4ｍを測る。現在は水田，畑として利用されている。

採集した遺物は須恵器５片，磁器１片，不明土器１片総計７片である。このうち２片を図示した（図版３の28～29）。

28は須恵器の甕である。古代のものと考えられ，外面には３㎝幅に９条の平行叩き目を施す。内面には同心円状の当て具痕が認められる。胎土は密であり，灰白色を呈する。焼成は還元硬質である。

29は須恵器杯Ｂの蓋の口縁部から体部にかけての部分である。８世紀後半のものである。口径は約12㎝である。外面は轆轤撫で調整を施す。胎土は密であり，長石を含み，色調は淡灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(39) 上田（うわだ）Ｂ遺跡　（図版15の39）　氷見市上田地内

竹里山山頂から西に派生する丘陵の南側斜面から平担地にかけて楕円形状に広がる。東西約100ｍ，南北約50ｍにわたって広がる。標高は15.9ｍ～24.5ｍを測る。現在は水田として利用されている。従来より土師器，錫杖が出土したことで知られている。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(40) 千久里（ちくり）城　（図版15の40）　氷見市中尾字萱戸他

氷見市街地の西方にそびえる標高137.4ｍの竹里山の山頂に築かれている。山頂からは阿尾城や中村山城，木谷城，遠く守山城までも望むことができ，この付近における軍事的拠点であったことがうかがえる。山頂部から伸びるほとんどの尾根筋に郭や防御施設が認められ，全体の規模は東西250ｍ，南北200ｍに及ぶ。広大な郭群と厳重な防御施設，さらに山頂部の物見台など山城遺構としては壮大なものであり，戦国期の鞍川氏の中心的城郭であると考えられる。今回の調査では遺物は確認できなかった。

(41) 竹里山（ちくりやま）岩屋　氷見市中尾地内

北西に千久里城，南東に泉中尾廃寺があり，白山神社に通じる谷の最奥部に位置する。標高は約70ｍを測る。岩屋は幅3.6ｍ，奥行4.8ｍ，高さ1.6ｍであり，その中央に1.4ｍ四方の護摩壇と想定される小高い土壇を設け，その奥の正面に石彫の不動明王を祀る。不動明王は高さ１ｍ

余りの座像であるが，石質が柔らかいため風化が甚だしく，時期等詳細は不明である。
この岩屋は室町時代に開削され，仏道修業僧が参籠したと考えられている（氷見市教委1993）。
今回の調査では，越中瀬戸２片，陶器１片を採集したが，いずれも細片のため図示しなかった。

(42) 大野南遺跡（おおのみなみ）　（図版15の42）　氷見市大野地内

今回の調査で新しく発見した遺跡である。上庄川河口より南方約2.6㎞のところに中尾集落があり，さらに北東約400ｍのところに大野集落がある。竹里山山頂から東に派生する丘陵には，中尾集落に接するものがある。本遺跡は，この丘陵から約170ｍ東方に大野集落の南に隣接する形で楕円形状に広がっている。標高は4.0ｍ～5.4ｍを測る。現在は畑として利用されている。

採集した遺物は須恵器４片，土師器14片，唐津１片の総計33片である。そのうち６片を図示した（図版３の30～35）。

30は須恵器の杯身の口縁部である。８・９世紀のものである。口径は約16㎝を測る。外面は横撫で調整を施す。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。

31は珠洲の壷である。外面，内面共に撫で調整を施し，内面には当て具痕が認められる。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。

32は須恵器の甕である。外面は３㎝幅に８条の平行叩き目を施す。内面には当て具痕が確認される。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は良くないが，還元硬質である。

33は珠洲の甕である。吉岡編年のⅣ・Ⅴ期に位置づけられ（吉岡1994），14・15世紀のものである。外面は３㎝幅に８条の平行叩き目を施す。内面には擦痕が確認される。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は環元硬質である。

34は須恵器の甕である。８・９世紀のものである。外面は３㎝幅に９条の叩き目を施す。内面上部は撫で調整痕が，下部は同心円状の当て具痕が確認できる。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。

(43) 泉中尾廃寺（いずみなかお）　（図版15の43）　氷見市泉字寺尾地内

本遺跡は，竹里山山頂から東に派生する丘陵によって形成される支谷の谷部から平坦地にかけて位置する。中尾集落の南端と接しており，現在は畑および住宅地として利用されている。明治時代に平安時代後期の宝冠阿弥陀如来座像が出土している。

採集した遺物は珠洲焼３片，土師器２片の総計５片である。このうち１片を図示した（図版３の35）。

35は珠洲の甕である。外面には３㎝幅に９条の平行叩き目を施す。内面には当て具痕が認められる。胎土はやや密であり，色調は淡灰色である。焼成は還元硬質である。

(44) 中尾坊田遺跡（なかおぼうた）　（図版15の44）　氷見市中尾地内

今回の調査で新しく発見した遺跡である。竹里山山頂から東に派生し，前述の中尾集落の北端に接する丘陵から約350ｍ離れた位置に，楕円形状に広がっている。北東を軸に幅400ｍ×

200ｍの範囲に広がる。標高は4.8～5.1ｍを測る。現在は水田として利用されている。

採集した遺物は土師器９片，須恵器６片，珠洲６片，伊万里１片，越中瀬戸１片の総計29片である。このうち４片を図示した（図版３の36～39）。

36は須恵器の甕である。古代のものである。外面は３㎝幅に９条の叩き目を施す。内面は撫で調整が確認できる。胎土は密であり，色調は灰色である。焼成は還元硬質である。

37は珠洲の擂鉢である。吉岡編年のⅤ期に位置付けられ，15世紀のものである。外面は撫で調整を施す。卸し目は３帯確認でき，１帯の幅は2.0㎝ある。条数は６条を数える。ほぼ全面に卸し目がみられる。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。

38は須恵器の杯蓋の体部である。９世紀前半のものである。外面，内面共に横撫で調整が施される。胎土は密であり長石が混じり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。

39は須恵器の杯蓋の口縁部である。９世紀のものである。口径は約14㎝である。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は還元硬質である。（坪田聡子）

(45) 中尾新保谷内遺跡（なかおしんぼやち）　（図版15の45）　氷見市中尾字寺尾

本遺跡は，前述の中尾集落の南東約400ｍの平坦地に位置する。標高は約5.0ｍ～6.0ｍを測る。東西約150ｍ，南北約200ｍの範囲に広がる。現在は水田として利用されている。

採集した遺物は，土師器26片，須恵器４片，越中瀬戸１片，伊万里１片，中世の土師器16片の総計48片である。そのうち６片を図示した（図版３の40～45）。

40は土師器の皿の底部である。10～11世紀のものと考えられる。底径は約６㎝を測る。内外面の調整は剝離のため不明瞭である。底部に回転糸切り痕が認められる。胎土は密であり，淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

41は土師器の椀の底部である。10～11世紀のものと考えられる。底部は約６㎝を測る。内外面及び底部の調整は剝離のため不明瞭である。胎土は密であり，橙色を呈する。焼成は良好である。

42は土師器の椀の口縁部付近である。10～11世紀のものと考えられる。外面に横撫で調整を施す。内面は剝離のため不明瞭である。胎土は密であり，淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

43は須恵器の杯蓋の体部から口縁部にかけての部分である。９世紀のものと考えられる。口径は約16㎝を測る。内外面に横撫で調整を施す。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

44は土師器の椀の口縁部である。口径は約12㎝である。10～11世紀のものと考えられる。内外面の調整は剝離のため不明瞭である。胎土は密であり，淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

45は土師器の椀の底部である。10～11世紀のものと考えられる。底部は約６㎝を測る。内外面の調整は剝離のため不明瞭である。底部に回転糸切り痕が認められる。胎土は密であり，灰

黄色を呈する。焼成は良好である。

(46) 沖布(おきのの)B遺跡　(図版15の46)　氷見市鞍川字沖布地内

上庄川の南岸一帯は，半径約2.0㎞の弧状に平坦地が広がっている。本遺跡は，この平坦地の中央部南よりにあり，水田に囲まれた沖布集落の西南に位置する。東西約300ｍ，南北約70ｍの範囲で楕円形に広がる。標高は約3.2ｍ～4.0ｍを測る。現在は水田として利用されている。従来より奈良・平安時代の遺跡として知られ，土師器や須恵器が採集されている。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(47) 糠塚南(ぬかづみみなみ)遺跡　(図版15の46)　氷見市鞍川地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。本遺跡は，前述した弧状平坦地の南西奥部に位置する。北西を軸に約150ｍ×約70ｍの範囲に広がる。標高は約4.2ｍ～5.0ｍを測る。現在は水田，畑として利用されている。

採集した遺物は，縄紋土器４片，須恵器３片，埴輪１片，珠洲３片，伊万里２片，越中瀬戸２片，中世の土師器３片，近世陶器１片，弥生土器か土師器か判別できなかったもの37片の総計56片である。このうち４片を図示した（図版３の46～49)。

46は珠洲の甕である。外面に３㎝幅に12条の平行叩き目を施す。内面は剝離し，調整は不明である。胎土は緻密であり，長石・石英・黒雲母を少量含み，灰白色を呈する。焼成は還元硬質である。

47は須恵器の甕である。外面に刷毛目・叩き目を施し，内面には横撫で・当て具痕が施される。胎土は緻密であり，長石・石英・黒雲母を少量含み，外面は黒青色，内面は灰白色を呈する。焼成は還元硬質である。

48は須恵器の口縁部である。口径は約12㎝を測る。内外面共に横撫で調整を施す。胎土は緻密であり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

49は須恵器の杯の口縁部である。口径は約11㎝を測る。内外面共に横撫で調整を施す。胎土は緻密であり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(48) 沖布(おきのの)C遺跡　(図版15の48)　氷見市沖布

今回の調査で新たに発見した遺跡である。本遺跡は，前述の弧状平坦部の南奥部，丘陵裾部に位置する。径約80ｍの円形に広がりをもつ。標高は7.0ｍ～13.0ｍを測る。現在は水田，畑として利用されている。

採集した遺物は，土師器１片，須恵器２片，珠洲３片，近世陶器１片，鉄製品１点（キセル)，銅製品１点（飾り金具）の総計10片である。このうち２片を図示した（図版４の50・51)。

50は須恵器の甕である。外面に３㎝幅に７条の叩き目を施す。内面に同心円状の当て具痕が認められる。胎土は緻密であり，灰白色を呈する。焼成は還元やや軟質である。

51はキセルの雁首である。先端部から軸部は約５㎝を測る。受け皿は0.8㎝を測る。首部の脂返しはやや湾曲する。

(49) **沖布（おきのの）A遺跡**　（図版15の49）　氷見市鞍川字沖布地内

本遺跡は，前述の弧状平坦地南東奥部，丘陵の東側斜面中腹部から裾部に位置する。東西約300m，南北約230mの範囲に広がる。標高は約6.0m～54.0mを測る。従来より弥生後期～奈良・平安時代の遺跡として知られ，弥生土器や土師器，須恵器が採集されている。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(50) **鞍川横羽毛（くらかわよこはげ）遺跡**　（図版16の50）　氷見市鞍川字横羽毛地内

今回の調査で新たに発見した遺跡である。上庄川河口から約3㎞遡った地点の南方約1.4㎞の所に横羽毛集落がある。本遺跡は，前述した弧状平坦部の最も東側，横羽毛集落の南方約300mの所にある，氷見市街地よりの丘陵中腹部に位置する。標高は約21.0m～25.0mを測る。現在は畑として利用されている。

採集した遺物は弥生土器1片，土師器1片，越中瀬戸1片，近世の土師器1片，弥生土器か土師器か分別できなかったもの267片の総計273片である。このうち4片を図示した（図版4の52～55）。

52は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約16㎝を測る。内外面に赤彩を施す。胎土はやや粗く，少量砂が混じり，赤橙色を呈する。焼成は良好である。

53は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約8㎝を測る。内外面に箆磨き調整が認められる。外面に赤彩を施す。胎土は密であり，外面は赤褐色，内面は黒褐色を呈する。焼成は良好である。

54は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約10㎝を測る。内外面に横撫で調整を施す。胎土は密であり，少量の長石・石英・黒雲母を含み，淡黄橙色を呈する。焼成は良好である。

55は土師器の直口壷の口縁部である。口径は約15㎝を測る。内外面共に撫で調整を施すが，内面は摩滅していている。胎土は緻密であり，少量の砂が混じる。色調は黄橙色を呈する。焼成は良好である。

(51) **朝日谷内（あさひやち）横穴**　（図版16の51）　氷見市朝日本町25

朝日山丘陵の南部は，朝日長山丘陵と呼ばれる丘陵である。本遺跡はその朝日長山丘陵の先端部より西方約100mの丘陵の斜面に位置する。標高は約10.0m～15.0mを測る。

内部構造は約1mの羨道に続いて，右側壁の長さ2.15m，左側壁2.5m，幅2.2m，高さ1.9mの玄室がある。遺物の出土例はなく，今回の調査では遺物は採集できなかった。

(52) **上日寺（じょうにちじ）中世墓群**　（図版16の52）　氷見市朝日本町16-8

朝日山丘陵の南部は，朝日長山丘陵と呼ばれる丘陵である。本遺跡は，その朝日長山丘陵の東端南より裾部，朝日山大神社の南方約150m，湊川の西方約300mのところに位置する。標高は約6.0m～10.0mを測る。従来より鎌倉初期～室町後期の遺跡として知られ，珠洲が出土している。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(53) **朝日長山古墳**　(図版16の53)　氷見市朝日本町708～710

朝日山丘陵の南部は，朝日長山丘陵と呼ばれる丘陵である。本遺跡は，その朝日長山丘陵の最南端に位置する。標高は約25.0ｍを測る。1952年に氷見高等学校歴史クラブにより発掘調査が行われている。その後，1972年に同クラブにより宅地造成に伴う緊急発掘調査が行われ，前方後円墳と考えられている。現在は消滅している。

同クラブによる２度にわたる発掘調査において，直刀５振，短剣１振，鉄鉾１振，鉄鏃，胡禄金具，冠帽片，杏葉，鞍，管玉，丸玉，土師器，須恵器，埴輪が出土した。

石室は竪穴式石室であり，東西壁を大型の石で積み上げ，南北壁を小型の石で積んで石室をつくっている。蓋石は，中央部は大型の薄手の石３枚を当て，南北両端はやや大型の石をもたせ積みして蓋石としている。今回の調査では遺物は採集できなかった。　(堀内大介)

(54) **朝日水源地遺跡**　(図版16の54)　氷見市朝日字馬場541・538

氷見市街地の南西に接した朝日山の南部に朝日長山と呼ばれる丘陵がある。本遺跡はこの朝日長山丘陵の南端と対面する丘陵斜面に位置する。昭和40年，浄水場裏の貯水場建設の際，縄紋後期から晩期におよぶ土器が確認されているが，今回の調査では遺物は確認できなかった。

(55) **朝日十字路遺跡**　(図版16の55)　氷見市朝日丘地内

朝日長山丘陵から南の丘陵一帯は朝日潟山と呼ばれるが，本遺跡はこの朝日潟山の北東端に位置する。水道工事の際に珠洲の壷と宋・明銭6484枚が確認されているが，今回の調査では遺物は確認できなかった。

(56) **朝日貝塚**　(図版16の56)　氷見市朝日丘151～154

朝日山丘陵の東南は潟山と呼ばれる標高20ｍ程度の丘で，本遺跡はその丘陵の東裾部に位置する。標高は３～７ｍを測る。

採集した遺物は，縄紋土器111片，弥生土器88片，古式土師器182片，円筒埴輪５片，須恵器71片，土師器165片，珠洲20片，黒色土器１片，越中瀬戸11片，伊万里11片，唐津１片，石器５点，不明陶器９片，弥生土器か土師器かが判別できなかったものが424片の総計1104片である。そのうち56片を図示した（図版４の56～90，図版５の91～111)。

56は石皿である。全長約18㎝，幅約14㎝，高さ約６㎝を測る。石質は粗い砂岩で，皿面に敲打痕が残る。側面に擦痕が有り，擦石に転用したと考えられる。

57は石錘である。破損し，ほぼ半分が残る。全長約４㎝，幅約５㎝である。石質は安山岩である。表裏両面をたたき，糸掛けを作出する打欠き石錘である。

58は縄紋時代中期後葉の串田新式期の縄紋土器である。波状口縁で縦方向に沈線を施す。胎土は密であり，雲母・砂粒を含む。色調は鈍い黄橙色を呈し，焼成は良好である。

59は縄紋時代後晩期の縄紋土器である。外面に条痕紋を施す。胎土は密であり，砂粒を含む。色調は外面が灰白色，内面が浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

60は縄紋時代中期後葉の串田新式期の縄紋土器である。胎土は密であり，小石を含む。色調

は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

61は縄紋時代中期後葉の縄紋土器である。外面に沈線，口縁部に貝殻複縁紋を連続的に施す。胎土は密であり，色調は褐色を呈する。焼成は良好である。

62は縄紋時代後期前葉の縄紋土器の口縁部で，口径は約18㎝を測る。口縁部外面には，節の細かいＲＬ斜縄紋と沈線を施し，器形は外反する。胎土は密であり，色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

63は縄紋時代後晩期の縄紋土器の口縁部である。口径は約20㎝を測る。外面にＲＬ縄紋を施す。胎土は密であり，石英・長石・雲母を多量に含む。色調は黄橙色を呈し，焼成は良好である。

64は縄紋時代中期の縄紋土器の口縁部である。口径は約30㎝を測る。内面に撫で調整を，外面には一条の沈線を施す。胎土は密であり，白色土・輝石・石英・長石・雲母を含む。色調は外面が灰褐色，内面はにぶい褐色を呈する。焼成は良好である。

65は弥生晩期の鉢の口縁部である。口径は口縁端部が欠損しているために明確ではないが，約22㎝を測ると考えられる。内外面に撫で調整を施し，その上は朱塗りされている。胎土は密であり，色調は黄褐色を呈している。焼成は良好である。

66は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約20㎝を測る。口縁部付近に撫で調整を施し，内外面縦刷毛による調整を施す。口縁部と頚部内面にススの付着が認められる。胎土は密であり，石英を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成はやや不良である。

67は弥生中期の壷の口縁部である。口径は約20㎝を測る。口縁部に篦描きによる刺突を施す。内外面に撫で調整，一部刷毛を用いる。また口縁端部から口縁部下部に切込みが認められる。胎土は密であり長石，石英，雲母や２～３㎜の小石を含む。色調は黄橙色を呈し，焼成は良好である。

68は弥生中期の壷の口縁部である。口径は約20㎝を測り，口縁部に擬凹線紋を２条施す。胎土は密であり，色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

69は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約10㎝を測り，全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，小石を含む。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

70は弥生土器の小松式期の甕の口縁部である（増山1989）。口径は約20㎝を測る。全面に撫で調整を施す。口唇部に刺突，内面には押引きの刺突が認められる。胎土は密であり，小石を含む。色調は黄橙色を呈し，焼成は良好である。

71は弥生後期の高杯の口縁部である。口径は約16㎝を測り，内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

72は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約15㎝を測り，内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，輝石，砂を少量含む。色調はにぶい橙色を呈し，焼成は良好である。

73は弥生土器の甕の頸部である。頸部径は約19㎝を測り，内面は１帯の幅１㎝で９条，外面

は１帯の幅1.3cmに14条の刷毛目を施す。胎土は密であり，石英を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

74は弥生後期の壷の口縁部である。口径は約15cmを測る。全面に撫で調整を施し，端部をつまみ出す。胎土は密であり、石英・長石および２～３mmの小石を含み，赤褐色を呈する。焼成は良好である。

75は弥生後期の甕の口縁部である。口径は約14cmを測り，内外面に横撫で調整を施す。胎土は密であり，砂粒を含む。色調はにぶい黄橙色を呈し，焼成は良好である。

76は土師器の甕である。口径は約22cmを測り，口縁部に撫で調整を施す。１帯の幅９～10mmで７条の刷毛目調整が内外面に認められる。胎土は長石，雲母，輝石，小石を含み，やや粗い。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

77は弥生土器の甕の口縁部である。口径は約15cmを測り，全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，小石を多量に含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

78は弥生中期の甕の口縁部である。口径は約18cmを測り，口縁部に刻み目を施し，口縁端部に赤彩が認められる。内外面には粗い刷毛調整を施す。胎土は密であり，色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

79は土師器の壷の口縁部である。口径は約19cmを測り，全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，砂粒を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

80は弥生土器の壷の口縁部である。口径は約15cmを測る。全面に撫で調整を施す。外面に、布をあてがう刷毛具状工具による横線紋が認められる。胎土は密であり、砂粒を含む。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

81は弥生後期の甕の口縁部である。口径は約14cmを測り，全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，砂粒を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

82は弥生後期の壷の頸部である。外面は１帯の幅９～10mmで11条の刷毛目を施す。内面に粘土の継ぎ目が認められる。胎土は密であり，砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈し，焼成は良好である。

83は弥生土器の直口壷の口縁部である。口径は約18cmを測る。外面は１帯の幅８mmで７条の刷毛目調整，内面は撫で調整が施され，口縁端部に凹線紋を施す。胎土は密であり，石英を含む。色調は明褐色を呈し，焼成は良好である。

84は弥生土器の直口壷の口縁部である。口径は約13cmを測る。外面を縦位の刷毛で調整しているが摩滅している。胎土は密であり，１mm大の小石を含む。色調は橙色を呈し，焼成は良好である。

85は土師器の甕の口縁部である。口径は約25cmを測り，口縁はゆるく外反する。外面は撫で調整を施すが，内面は摩滅している。胎土は密であり，色調は浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

86は弥生中期の壷の口縁部である。口径は約25㎝を測る。内面に綾杉刺突が施され，口縁部付近に赤彩が見られる。胎土は密であり，小石，石英を含む。色調はにぶい黄橙色を呈し，焼成は良好である。

87は土師器の壷の口縁部である。口径は13㎝を測る。内外面には撫で調整を施す。胎土は密であり，小石を含む。色調は黄橙色を呈し，焼成は良好である。

88は弥生後期の甕の口縁部である。口径は約10㎝を測る。全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，石英，長石を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

89は弥生土器の甕の口縁部である。口径は12㎝を測る。口縁端部に右斜め下に向って刻み目を施す。胎土は密であり，色調は明褐色を呈する。焼成は良好である。

90は弥生土器の壷の頸部である。頚部復元径は約20㎝を測る。外面に刷毛目調整が認められる。内面には撫で調整と削り調整を施す。胎土は密であり，黒雲母を多量に含む。色調はにぶい橙色を呈し，焼成は良好である。

91は土師器の底部で，底径は約６㎝を測る。胎土は密であり，小石を含む。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

92は弥生土器の壷の底部である。底径は約1.6㎝を測る。胎土は密であり，砂を多量に含む。色調は淡黄色で，焼成はやや不良である。

93は土師器の高杯の脚部である。底径は約18㎝を測る。全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，色調は黄橙色を呈する。焼成は良好である。

94は円筒埴輪である。口径は約30㎝を測る。外面には斜位と横位の刷毛を施し，１帯の幅は約１㎝であり，条数は２～３本を数える。又，油煤が付着している。内面は撫で調整を施したようであるが，剝落のため不明瞭である。胎土は密であり、２㎜の小石を微量含んでいる。色調は淡黄橙色を呈し，焼成は良好である。

95は土師器の甕の口縁部である。口径は約21㎝を測る。内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，小石を含んでいる。色調は橙色を呈し，焼成は良好である。

96は土師器の甕の口縁部である。口径は約22㎝を測る。内面は，１帯の幅６～８㎜で６条の横位刷毛目調整，外面は１帯の幅８～10㎜で７条の斜位刷毛目調整を施す。口縁部端部に撫で調整が認められる。胎土は密であり，長石・雲母・輝石・小石を含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

97は古式土師器の甕の口縁部である。口径約18㎝を測る。内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，石英・長石を含む。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

98は土師器の壷の口縁部である。口径は約22㎝を測る。内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

99は土師器の長甕の口縁部である。口径は約19㎝を測る。全面に撫で調整が認められる。胎土は密であり，石英・長石・黒雲母を少量含む。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

100は土師器の鉄鉢形鉢の口縁部である。口径は約16㎝を測る。全面に撫で調整を施す。胎土は密であり，色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。

101は土師器の皿の底部である。底部は約14㎝を測る。全面に撫で調整を施す。外面には接合痕が認められる。胎土は密であり，白色粒を含む。色調は黄灰色を呈し，焼成は良好である。

102は土師器の壷の口縁部付近である。口径は口縁端部が欠損しているために明確ではないが，約16㎝を測ると考えられる。胎土は密であり，色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

103は古代の土師器の口縁部である。器種は甕か壷であるが不明である。口径は約15㎝を測る。内外面に撫で調整を施す。さらに外面に一帯１㎝の幅で８条を数える横位と縦位の刷毛目調整が認められる。また，内面にも一帯１㎝の幅で９条の横位刷毛目調整を施す。胎土は密であり，色調は明褐色を呈する。焼成は良好である。

104は須恵器の杯身の口縁部である。口径は約15㎝を測る。内外面に横撫で調整を施す。胎土は密であり，石英・長石を微量に含む。色調は内面が灰白色，外面は灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

105は土師器の椀の口縁部である。口径は約6.6㎝を測る。全面に撫で調整を施す。胎土は密であり、１㎜の小石や石英・長石を含む。色調は黄橙色を呈し，焼成は良好である。

106は弥生土器の器台の口縁部である。口径は約９㎝を測る。全面に撫で調整を施す。内面には赤彩が認められる。胎土は密であり，雲母を含む。色調は灰白色，焼成は良好である。

107は須恵器の杯蓋の口縁部である。口径は約18㎝を測る。胎土は密で，色調は灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

108は須恵器の杯蓋の口縁部である。口径は約14㎝を測る。胎土は密であり，色調は青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

109は須恵器の蓋の体部である。内外面に横撫で調整を施す。胎土は密であり，石英・長石・黒雲母を微量に含む。色調は内面が灰色，外面は暗灰黄色を呈する。焼成は還元硬質である。

110は須恵器の壷の口縁部である。口径は約18㎝を測る。外面に斜め刷毛を施す。胎土は密であり，色調は明褐色を呈する。焼成は還元硬質だが，やや不良である。

111は珠洲のすり鉢の口縁部である。吉岡編年のⅣ期に位置付けられ（吉岡1994），14世紀代のものである。口径は約28㎝を測る。胎土は密であり，小石混じりである。色調は灰色を呈し，焼成は還元硬質である。（塩田明弘）

⑸⑺ 朝日潟山（あさひかたやま）古墳群　（図版16の57）　氷見市朝日丘地内

前述した朝日潟山の尾根の南東部，丘陵頂部から裾部にかけて立地している。1993年の測量の結果，前方後方墳の１号墳，方墳の２号墳の２基から構成されることが確認されている。

１号墳は前方部長17ｍ，幅14ｍ，高さ1.8ｍであり，後方部長16ｍ，幅18ｍ，高さ1.9ｍを測る。２号墳は長径16ｍ，短径９ｍで，高さ0.6ｍを測る。

１号墳から５世紀後葉から６世紀初め頃の須恵器を採集している，今回の調査では遺物は確

認できなかった。

(58) 朝日橋詰遺跡　（図版16の58）　氷見市朝日本町地内

本遺跡は，南北に流れる湊川下流域の西岸に位置する。径約25ｍあまりの広がりを持ち，北西約400ｍには朝日山大神社，北約200ｍには蓮乗寺を望む。現在は住宅地となっている。従来より中世の遺跡として知られ，五輪塔等が採集されているが，今回の調査では遺物は採集できなかった。

(59) 御座町遺跡　（図版16の59）　氷見市伊勢大町地内

本遺跡は，南北に流れる湊川を西に望み，岩上遺跡の北約300ｍ，朝日貝塚の北東約400ｍに位置する。南北2500ｍ，東西1500ｍの範囲に楕円形状に広がっており，現在は商店街を中心とする市街地となっている。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(60) 岩上遺跡　（図版16の60）　氷見市伊勢大町地内

朝日山丘陵の東南部は，朝日丘（潟山）と呼ばれており，この付近には，朝日貝塚が所在する。本遺跡はその朝日潟山の東方約400ｍ，御座町遺跡の南方約300ｍに位置し，朝日貝塚と湊川を挟んで正対している。現在は住宅地を中心とした市街地となっている。従来より縄紋～中世の遺跡として知られている。今回の調査では多数の遺物を採集した。このうち，縄紋２片，土師器２片，須恵器８片，弥生３片，円筒埴輪２片，古代１片，越中瀬戸１片の総計19片を図示した（図版５の112～130）。

112は弥生土器の甕の底部である。底径約５㎝を測る。外面に刷毛目を施し，底部周辺には指頭圧痕による調整を施す。胎土は密であり砂を多量に含み，橙色を呈する。焼成は良好である。

113は弥生土器の甕の口縁部である。口径は約15㎝を測る。外面は篦削り調整を施す。胎土は密であり１㎜の砂を多量に含み，橙色を呈する。焼成は良好である。

114は縄紋土器である。晩期に位置付けられる粗製土器で，内外面に条痕調整を施している。胎土は密であり，１㎜の砂を多量に含み黄橙色を呈する。焼成は良好である。

115は縄紋土器である。中期前葉のものである。外面に半隆起線とＬＲの縄紋を施し，赤彩も施す。胎土は粗であり，橙色を呈する。焼成は良好である。

116は須恵器の横瓶であり，９世紀のものである。外面には３㎝幅に24条の平行叩き目を施す。胎土は密であり，雲母を含み，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

117は須恵器の杯Ｂ蓋のつまみ部である。９世紀のものである。内外面に撫で調整を施す。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

118は弥生土器の高杯である。胎土はやや粗であり，赤褐色を呈する。焼成は良好である。

119は円筒埴輪である。６世紀のものである。内面には，口縁から約２㎝下に１㎝の幅で刷毛目調整が見られる。口径は約27㎝を測り，胎土は粗であり，明黄褐色を呈する。

120は須恵器の杯蓋である。外面に篦削り調整を施す。胎土は密であり，小石が混じり，青

灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

121は須恵器の杯蓋である。外面には箆削り調整を施す。胎土は緻密であり，外面は淡黄灰色，内面は暗灰色，断面は青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

122は須恵器の壷の胴部である。８世紀のものである。内外面共に横撫で調整を施す。外面には自然釉が認められる。胎土は緻密であり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

123は円筒埴輪の口縁部である。６世紀のものである。口径は約30㎝を測る。内外面共に刷毛目調整を施す。胎土は密であり，赤褐色を呈する。焼成は良好である。

124は古代の甕の口縁部である。口径は約24㎝を測る。内外面共に撫で調整を施す。胎土は密であり，赤褐色を呈する。焼成は良好である。

125は須恵器杯身Ａ類の底部である。底径は約8.8㎝を測る。内面に横撫で調整を，外面には箆削りを施す。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

126は越中瀬戸の壷の口縁部である。口径は約7.4㎝を測る。内外面に釉を施す。胎土はやや粗であり，長石，小石を多く含み，暗赤褐色を呈する。焼成は良好である。

127は須恵器の甕の頸部である。頚部より下の内外面に撫で調整を施し，さらに外面に叩き目，内面に同心円状の当て具痕が認められる。胎土は密であり，２～３㎜の小石，長石を多く含み，黒灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

128は土師器の土錘である。胎土は密であり，淡黄橙色を呈する。焼成は良好であり，孔は直径約1.5㎝，長さ約5.5㎝を測る。

129は土師器の土錘である。胎土は密であり，鈍い黄橙色を呈する。焼成は良好であり，孔は直径約1.5㎝，長さ約6.5㎝を測る。

130は須恵器の甕である。外面は格子状の叩き目を施し，内面には同心円状の当て具痕が認められる。胎土は緻密であり長石を含み，表面は暗灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(61) 伊勢玉神社中世墓群（図版16の61）　氷見市伊勢大町１丁目９他

本遺跡は，南北に流れる湊川の東約250ｍ，氷見駅の西約150ｍのところにあり，御座町遺跡の南東約200ｍ，岩上遺跡の北東約200ｍに位置する。周囲は住宅地である。鎌倉，室町時代以来の神社として知られ，その境内に中世墓群が所在する。以前の調査では珠洲が採集されているが，今回の調査において遺物は採集できなかった。

(62) 中尾ガメ山遺跡（図版15の62）　氷見市中尾地内

千久里山の南方丘陵から東に延びる支陵の１つにガメ山がある。遺跡付近は，仮称上庄谷ラグーンの一支谷の奥部にあたり，その丘陵裾部のひとつに位置する。

昭和50年，中国鋳造銘のある銅銭６㎏余り，約1800枚が出土した。上限は「開元通宝」(713)，下限は「咸淳元宝」(1265) に及び，南北朝期を下る遺跡ではないことが明らかである。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(63) 中尾山田遺跡　(図版15の63)　氷見市中尾地内

本遺跡は，前述の中尾集落南方にある谷の西側最奥部に位置する。標高は約10～30ｍを測る。本遺跡から南東約100ｍで中尾ガメ山遺跡に達する。現在は水田となっている。以前の調査では，約50ｍ四方に広がっていたが，今回の調査では北へ25ｍ程範囲を拡大することを確認した。従来より古代の遺跡として知られ，炭焼窯に伴うものと思われる須恵器が採集されている。今回の調査では須恵器１片を採集し，これを図示した（図版５の131)。

131は須恵器の蓋である。口径は約14㎝を測る。内外面共に横撫で調整を施す。胎土は密であり，わずかに白色粒を含み，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(64) 中尾横穴群　(図版15の64)　氷見市中尾字寺尾地内

本遺跡は，前述した中尾山田遺跡（古代)，中尾ガメ山遺跡（鎌倉）が所在する谷の南東最奥部に楕円形に広がる。従来より，古墳時代の遺跡として知られる。詳細は不明である。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(65) 荒館Ａ遺跡　(図版15の65)　氷見市十二町荒館地内

前述した上庄川下流域南岸の弧状平坦部の最奥部から南方へ延びる丘陵の頂部(標高88.8ｍ)に，本遺跡は立地する。約75ｍ四方に広がる。南東方向には十二町潟周辺の水田が開けており，南方500ｍ地点には住吉神社がある。従来より中世城郭伝承地として知られる。詳細は不明である。今回の調査では遺物は採集できなかった。

(66) 湊川中の橋付近石造物出土地　氷見市本町・比美町

以前，湊川の河川竣設工事において石造物が出土した。詳細は不明である。　(滝 寿美代)

(67) その他の採集遺物

遺跡として設定した地区外の採集品である（図版３の132，134～138，140)。採集地区の座標については，第３図を参照されたい。

132は泥面子である。18世紀末から19世紀初めのものと考えられる。長径約1.7㎝を測る。面型にはめ込んで作成されたものであり，子供用玩具と考えられる。胎土は緻密であり，色調は淡黄色を呈する。焼成は極めて良好である（Ｘ＝－17.5，Ｙ＝96.0)。

134は近世陶器の灯明皿である。口径は約８㎝を測る。外面上半部は撫で調整，下半部及び底部は削り調整が行なわれている。内面には灰白色の釉を全面に施し，貫入が認められる。桟部はつまみ出しである。胎土は密であり，焼成は良好である（Ｘ＝－16.5，Ｙ＝96.0)。

135は中国製白磁椀の底部である。18世紀後半のものと考えられる。底径は約3.8㎝，残存器高約2.1㎝を測る。内外面は白色の釉が施される。高台とその周辺，及び底部周辺に釉剝ぎ痕が認められる。胎土は密であり，焼成は極めて良好である（Ｘ＝－16.0，Ｙ＝96.0)。

136は伊万里の筒茶碗の口縁部から体部にかけての部分である。18世紀後半のものと考えられる。口径約８㎝を測る。外面には圏線および何らかの紋様があるが，詳細は不明である。内面には四方襷文を染付けによって描いている。胎土は緻密であり，焼成は極めて良好である（Ｘ

＝－17.0，Y＝96.0)。

137は伊万里の筒茶椀の底部である。18世紀後半のものと考えられる。底径は約4㎝，残存器高約1.5㎝を測る。内外面に透明釉を施す。見込にはコンニャク印判による五弁花紋を施し，外面には矢羽根状の紋様を施す。胎土は密であり，焼成は極めて良好である（X＝－17.0，Y＝95.0)。

138は近世陶器椀の底部である。底径は約5.2㎝を測る。内面に淡黄色，外面に灰オリーブ色の釉を施す。内面に黄褐色の釉で寿字か，山水紋を描いている。外面にはカンナ削りが認められる。胎土は緻密であり，焼成は極めて良好である（X＝－15.5，Y＝94.5)。

140は近世陶器椀の口縁部である。口径約11㎝を測る。露胎部はにぶい黄橙色を呈している。内面は一面に青磁釉を施しており，外面はピラ掛けにした青磁釉による紋様を施す。胎土は緻密であり，焼成は良好である（X＝－17.0，Y＝95.5)。　（石内詩保）

2　遺物の散布状態

今回，1994年度調査分であるＢ地区から2290破片・11.53個体もの大量の遺物を採集した。各遺物は縄紋時代から近世に至るものである。

当地域は氷見市の中央東部にあたり，1993年度調査分であるＡ地区の旧十二町潟を望む朝日山丘陵を始めとする舌状の丘陵と，それに囲まれた平野，海岸部の砂丘からなる。特に東南部の朝日山丘陵の先端部に接する砂丘は，旧十二潟に張出した砂嘴の根元にあたり，現在は市街として利用されている。この付近は遺跡が集中しており，有名な朝日貝塚もここに立地している。

前回に引き続き，調査域に国土座標Ｘ＝138°59′55″，Ｙ＝35°48′を原点とした１単位１㎞，一辺500ｍの方眼を設定し，北東コーナーの座標を地区名とした。今回も前回と同様，遺物の散布状況を地区ごとに捉える事により，地域の歴史的な動向を探ることが目的である。

(1)　縄紋時代遺物の散布状態

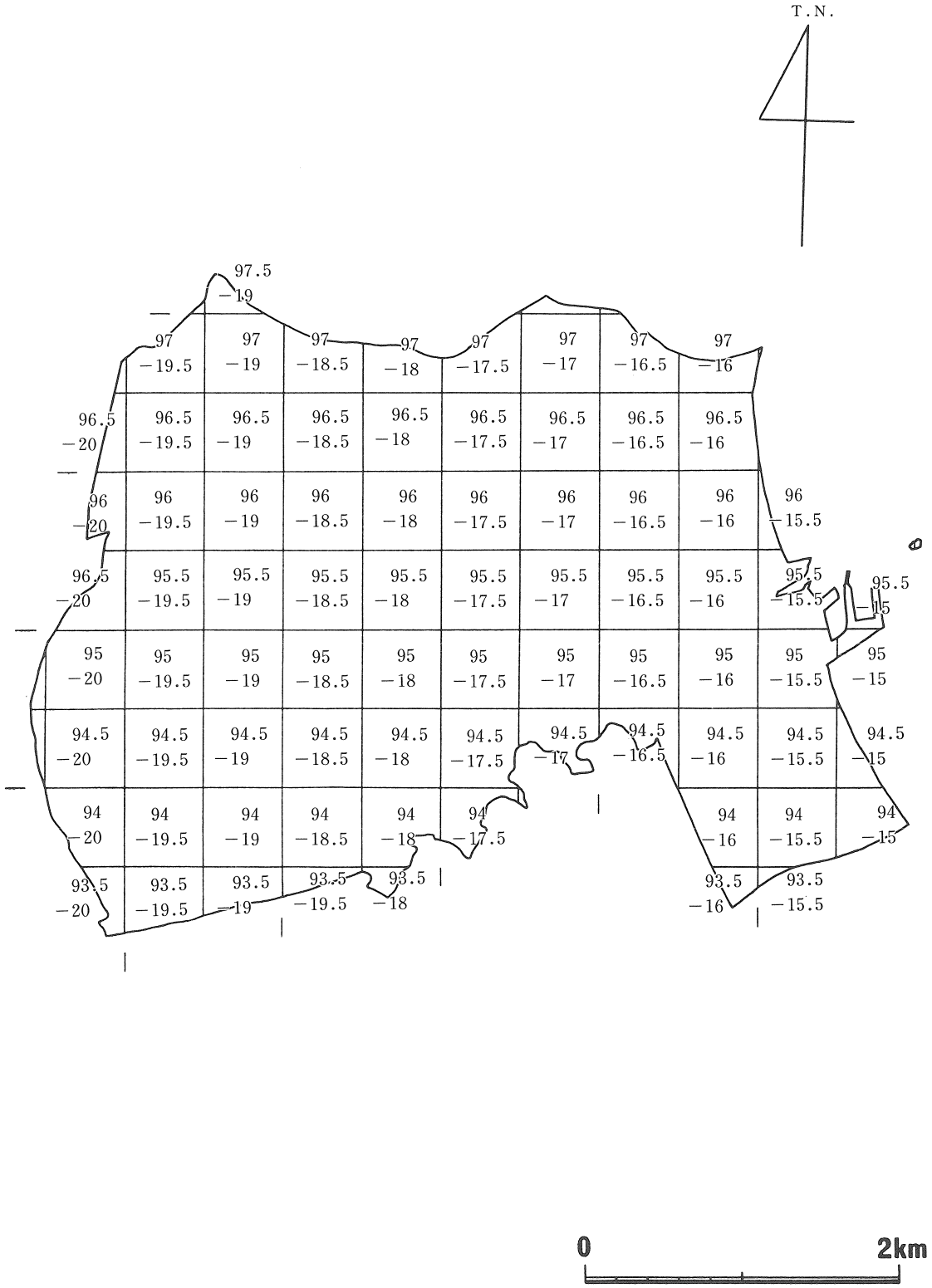
縄紋時代の採集遺物は，土器124片・0.21個体分，石器８点である。土器は小片がほとんどであり，器種の特定が出来る個体は少ないが，深鉢の口縁部と思われるものを数点確認した。石器は，石皿，石錘，石槍の先端部と思われる個体の他，剝片を２点採集した。これらの遺物の採集地点は６地区である。

100片以上の縄紋遺物が採集された（Ｘ＝－15.5，Ｙ＝94）地点は朝日貝塚・岩上遺跡があり，いずれも丘陵の裾部に立地する。また前年度多くの遺物が採集された砂嘴上の遺跡との関係も示唆される。他地区の採集地点も入り組んだ丘陵の裾，または台地上に分布し，当時の海岸線や潟湖との関連が考えられる。

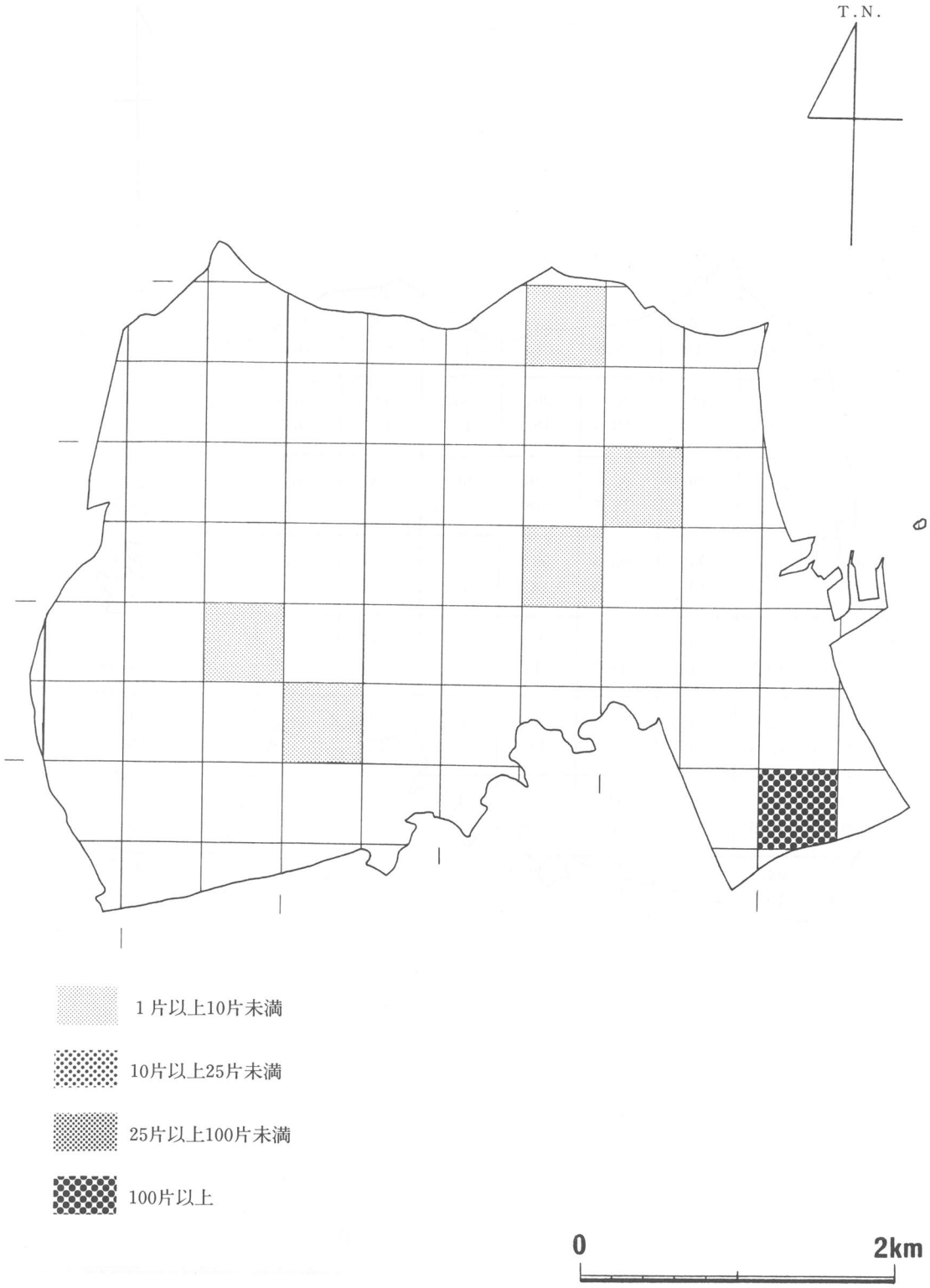
(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態

弥生・古墳時代の採集遺物は，弥生土器108片・1.76個体分，土師器38片・0.02個体分，須恵器４片・0.07個体分，埴輪30片・0.03個体分の他弥生～古墳時代で細分不可能な破片が981片であった。これらの遺物の採集地点は14地区である。

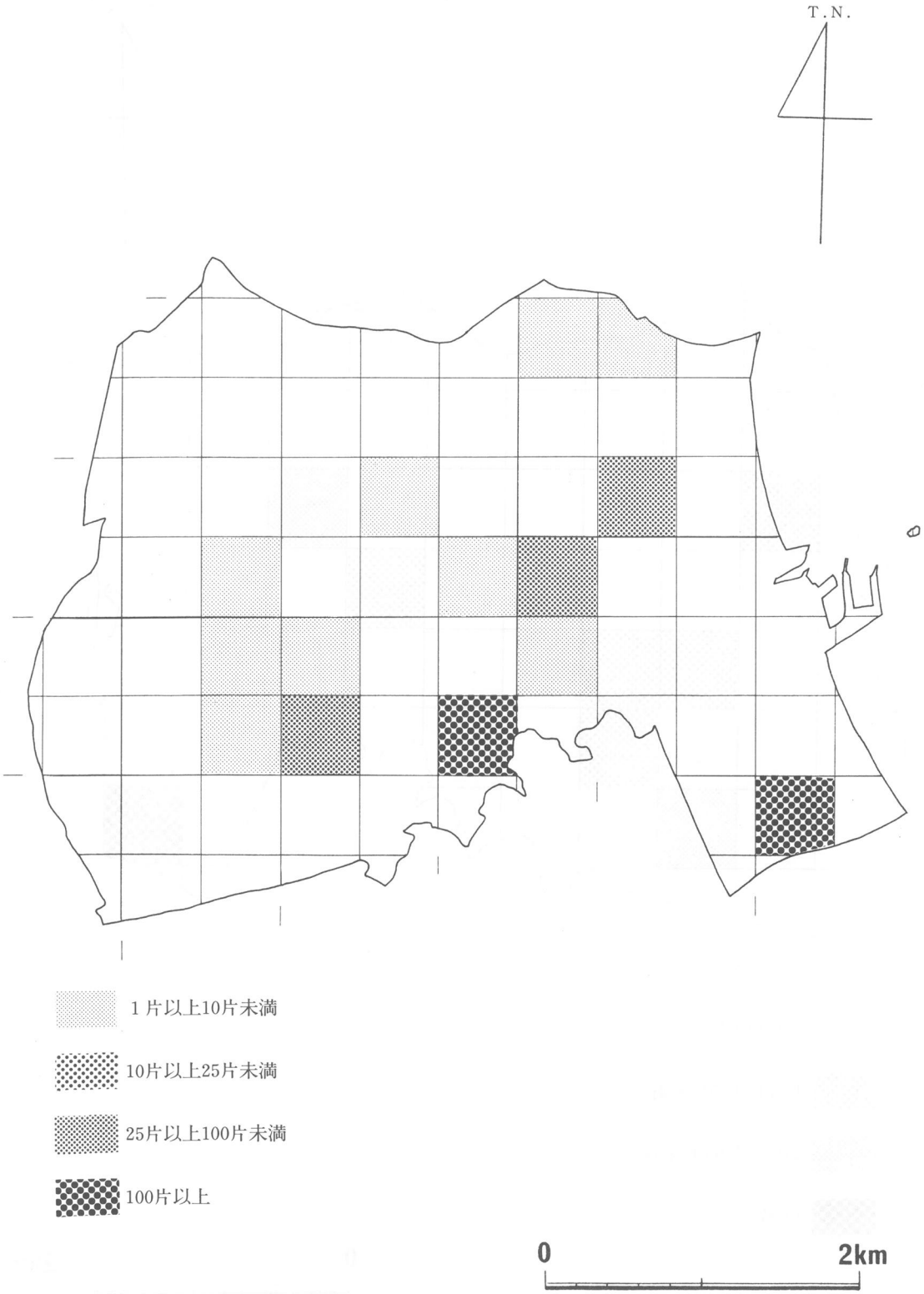
当時代では縄紋時代よりさらに採集地点の分布が広がり，破片数も増加する。特徴的なのは縄紋時代遺物の採集された遺跡から引き続き弥生・古墳時代遺物が採集され，地域的な分布を見せる点である。（Ｘ＝－15.5，Ｙ＝94）の朝日貝塚・岩上遺跡，（Ｘ＝－16.5，Ｙ＝96）の諏訪野Ｂ遺跡，（Ｘ＝－17，Ｙ＝95.5）の鞍川金谷遺跡，（Ｘ＝－18.5，Ｙ＝94.5）の糖塚南遺跡，（Ｘ＝－19，Ｙ＝95）の泉Ｃ遺跡などが，広がりをもって継続される。またこのことと関連し，弥生・古墳時代の人々の丘陵上から低湿地などのある平野への進出が行われたと考えられる。また埴輪の採集された朝日貝塚，岩上遺跡，糖塚南遺跡は，いずれも朝日山丘陵裾部に立地し，丘陵上の古墳群との関係が示唆される。



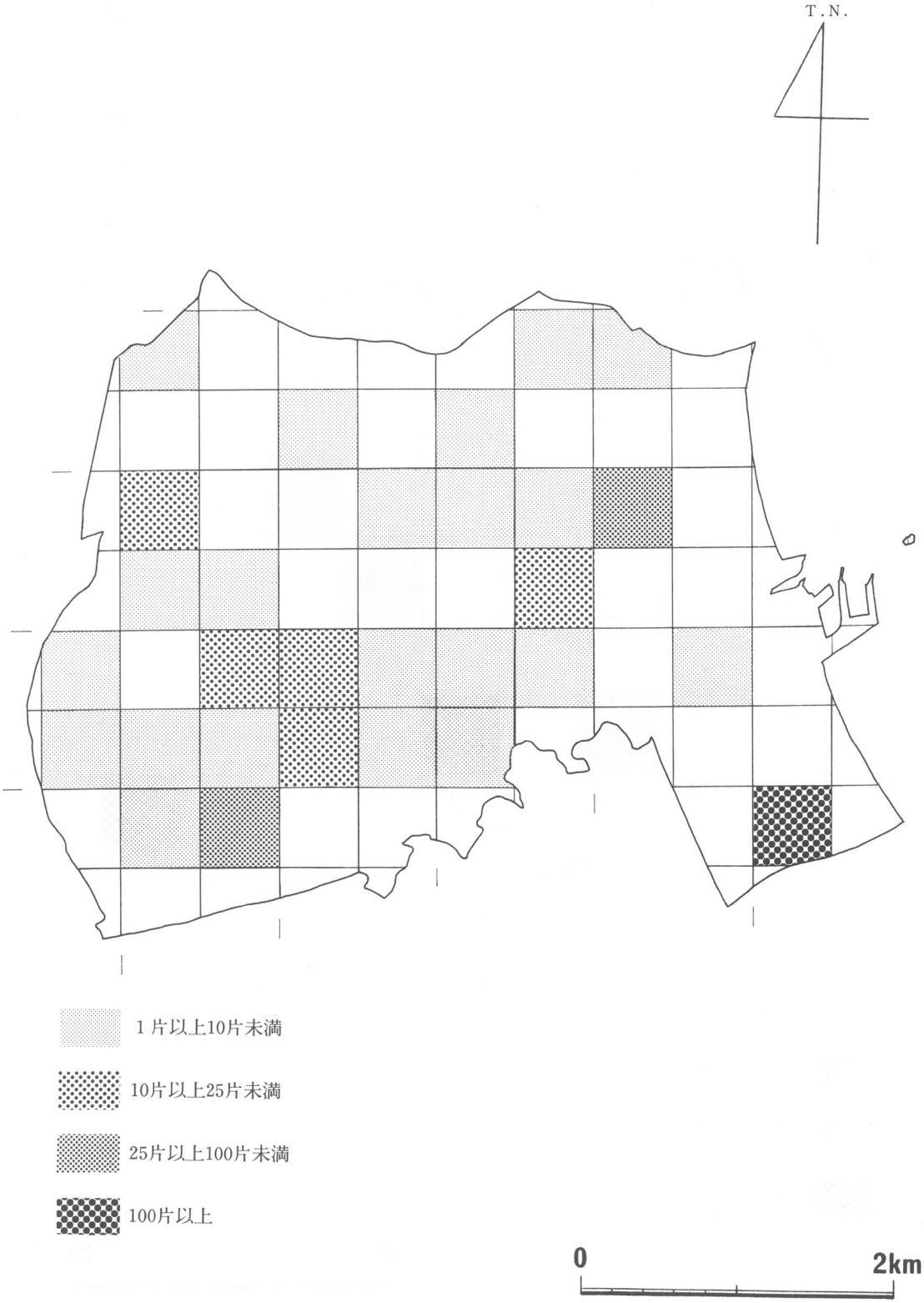
第4図　B地区図（国土座標 X＝138°59′55″ Y＝35°48′を基準とし500m四方の方眼を組んだもの，縮尺1/40,000）



第5図　B地区縄紋時代の遺物散布図

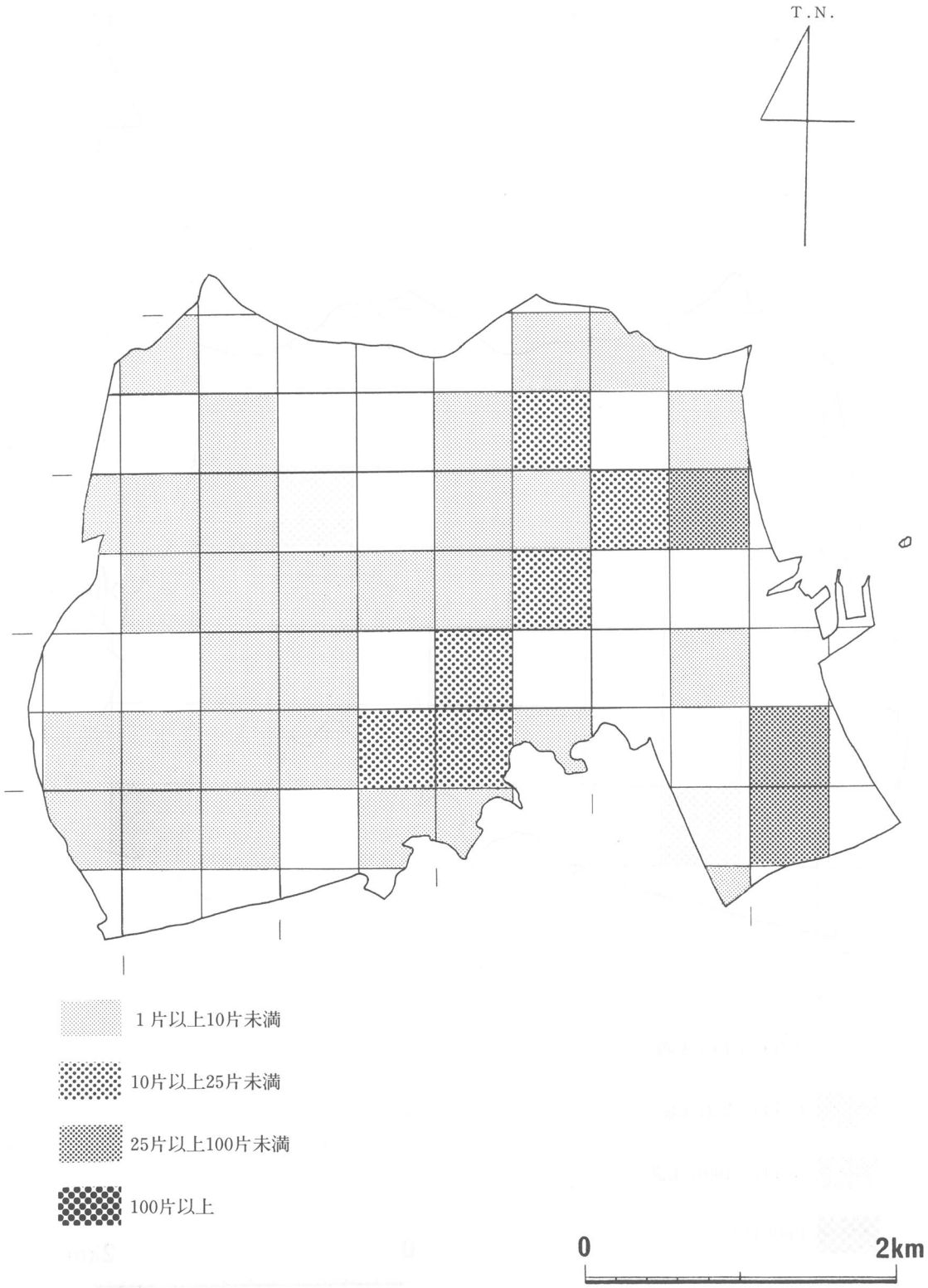


第6図　B地区弥生・古墳時代の遺物散布図



第7図　B地区古代の遺物散布図

第8図　B地区中世の遺物散布図



第9図　B地区近世の遺物散布図

(3) 古代遺物の散布状態

古代の採集遺物は，土師器212片・1.11個体分，須恵器119片・1.61個体分，黒色土器４片，製塩土器２片，土錘２個体であった。これらの遺物の採集地点は29地区である。

古代はこれまでの時代より分布地区・採集遺物の量が増す。時代の変遷と共に，人々の生活の場が平野・丘陵を問わず広がって行った事を示すと考えられる。しかし海岸に接した地域では遺物の分布が見られず，当時の海岸線がわずかに内陸にあったか，あるいは海が交通の手段や大規模な漁撈の場としては利用されていなかった可能性が指摘できるだろう。しかし朝日貝塚・岩上遺跡は前時代に引続き存続し，当地区が重要な生活拠点であった事を示している。

(4) 中世遺物の散布状態

中世の採集遺物は，土師器51片・0.65個体分，珠洲72片・0.13個体分，青磁６片・0.03個体分，白磁１片，瀬戸美濃１片であった。これらの遺物の採集地点は25地区である。

前時代よりやや遺物の量が減少するが，古代の様相を受けつぎながらもやや海岸よりに遺物の分布が移動する傾向が見られる。古代では見られなかった海岸の利用が，何らかの形で行われるようになったのであろう。現在の市街地にあたる（X＝－15.5，Y＝94.5）地区でも遺物の分布が見られ，朝日貝塚・岩上遺跡がある（X＝－15.5，Y＝94）地区と共にその成立に深く関わったのであろう。

(5) 近世遺物の散布状態

近世の採集遺物は，土師器21片・0.06個体分，伊万里72片・1.18個体分，越中瀬戸104片・1.34個体分，近世陶器88片・0.97個体分，唐津６片・0.03個体分，信楽１片，京焼系陶器１片0.07個体分，銅製品（きせる）２個体であった。これらの遺物の採集地点は38地区である。

近世になると再び遺物の量が増加し，東部海岸方面に遺物が多く分布するようになる。また今までには遺物の散布が見られなかった地域にも遺物が分布し，当地域の人々の生活場所が広がった事を示している。近世は基本的に中世の分布の傾向を踏襲し，当地域が飛躍的な発展を遂げた時期と言えるだろう。

(6) 小　結

当地区は，基本的に1993年度調査分であるＡ地区と同様な遺物の散布状態の推移を示しながらも，その地形が示す特異性を強く表している。

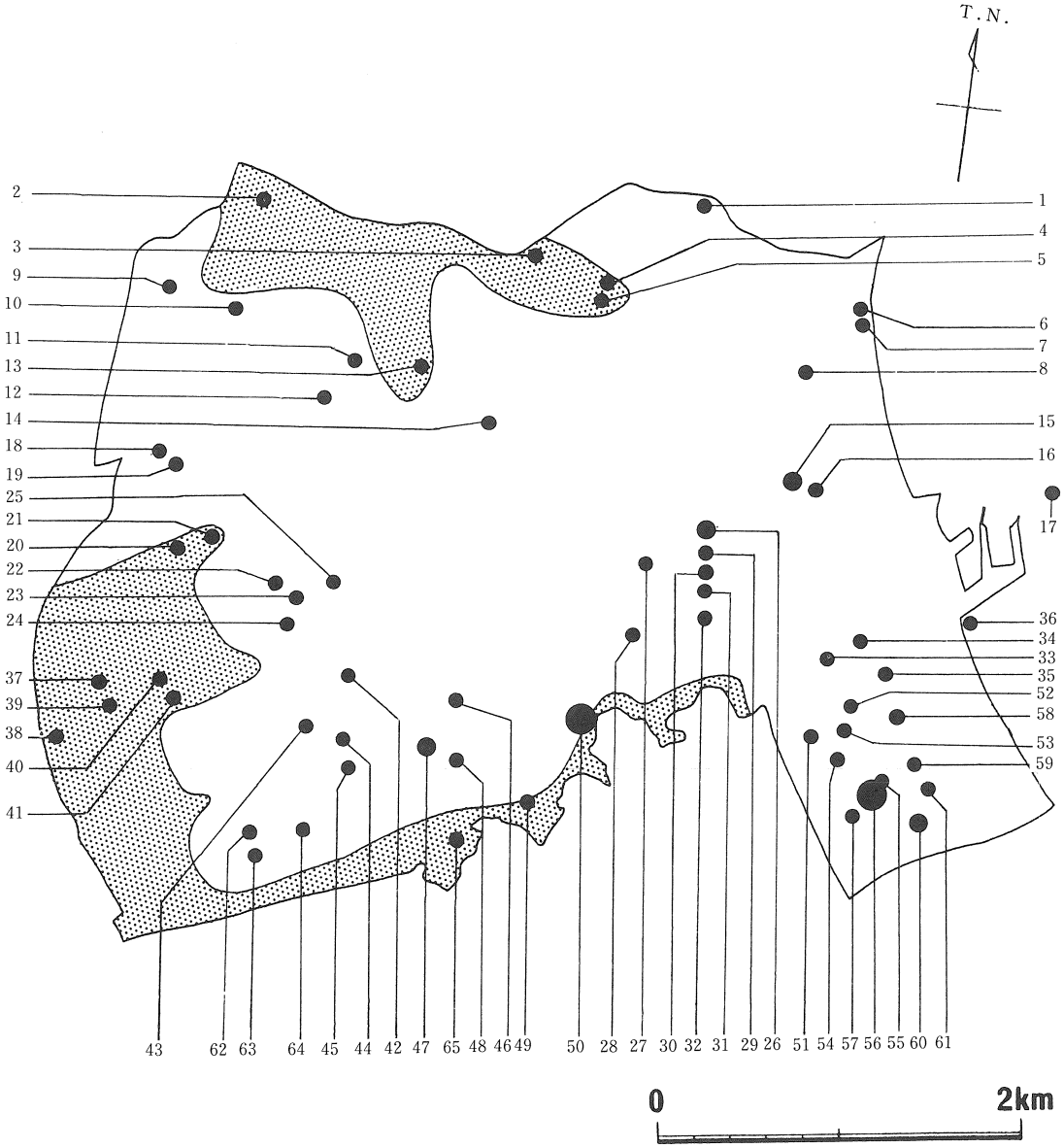
縄紋時代は舌状の丘陵裾部にその居住の場を選び，海岸または河川沿いの低湿地と丘陵上の森林を狩猟採集生活の舞台にしていたと考えられる。

弥生・古墳時代になると若干平野にも遺物の分布が広がるが，縄紋時代から継続する遺跡もかなり多い。稲作の伝来による生活基盤の変化後も，丘陵裾部は居住に適していたのであろう。

古代になると遺物の量が増加し，分布も一気に広がる。丘陵の谷間等に広がった平坦部に水田を造営するなど平野の本格的な開発が行われたと考えられる。そのため地域としての中心はやや内陸方面にあり，海岸部の開発はやや遅れていたのではないだろうか。

中世になると遺物の散布が全体的に減少するが，これはＡ地区でも同様の現象が確認できる。ただし今まで見られなかった海岸部の遺物の散布が見られるようになり，地域的な海の利用がこのころから開始され，海岸地方への集村化が行われたと考えられる。

近世はさらにこの傾向が強くなり，遺物の量が再び増加し海岸地方への分布の集中がみられる。現在の市街もこの段階で成立したのであろう。さらに地区全体へ遺物の分布は広がり，人口の増加とともに地域全体へ生活空間が広がったと考えられる。　　（長谷川幸志）



第10図　Ｂ地区の遺跡の位置（図版13～16参照）

第3章　おわりに

1994年度の分布調査によって，2290破片，口縁部11.53個体分の遺物を採集し，２カ年の調査採集遺物は総計3369破片，15.1個体分となった。この地区ではこれまで54遺跡が確認されていたが，遺跡数は新たに11遺跡を加え，65遺跡となった。また，１遺跡について従来認定されていた遺跡の範囲を拡張した。

1994年度に調査をおこなったＢ地区は氷見市の中央東部にあたり，上庄川，余川川など氷見市街を流れる主な川の周辺部とそれにともなう竹里山，朝日山より派生する丘陵一帯からなる地区である。この地区には現在，前述した川の下流域および河口付近を中心として市街地が存在する。また，丘陵の裾部を中心に集落が存在し，その他の部分は田畑として利用されている。遺跡は主に丘陵部・丘陵裾部・河川付近・海岸付近を中心として存在している。時代は縄紋時代から近世・近代までみられる。

従来の調査によって，本地区には朝日貝塚・岩上遺跡という縄紋遺跡が知られていた。これらの遺跡は海岸付近に立地するものである。同市内の大境遺跡が海岸付近の洞穴に立地することを考えても縄紋人が有磯海の豊かな海産物を基盤とした生活を営んでいたことがわかる。また，これら海岸部の遺跡においては，一箇所に集中する傾向が強い。これ以外にも縄紋遺物の分布は氷見潟付近か内陸部に位置しており，海産物を基盤とする縄紋人の姿を髣髴とすることができる。

弥生・古墳時代になると，前述した朝日貝塚・岩上遺跡以外に内陸部でも遺物が分布する状況がみられるようになる。これらはおもに現在の丘陵裾部，すなわち，かつての氷見潟の縁辺部に位置している。このほかに余川川下流域に遺物の分布がみられる。同様の傾向は，古墳が上庄川下流域と内陸部に分布することにもあらわれている。これは弥生・古墳社会における生業の変化と氷見潟への進出を示しているのであろう。しかしながら，遺物の分布はある程度の広がりをもつものの，一部に集中する傾向がみられる。

古代には遺物の分布が全面的な広がりを示すようになる。特に上庄川流域，竹里山周辺においてこの傾向が顕著である。内陸部への進出がかなり明確になってくるが，遺跡の立地は相変わらず丘陵裾部が多く，かつ谷に沿った傾向がみられることなどから，氷見潟およびこれを取り巻くラグーンの開発が並大抵のことではなかったことがわかる。

中世になると，それまでみられなかった余川川下流域・河口域付近の遺物分布が散見されるようになってくる。これは朝日貝塚の周辺以外において海岸部への進出がみられた結果であろう。遺跡は朝日貝塚の周辺と余川川河口域に集中する。上庄川下流域においては朝日貝塚の周辺以外に遺物はあまり分布せず，内陸部に集中する傾向がみられる。また，木谷城，竹里城などといった丘陵部の開発もみられるようになってくる。1993年度の調査においても指摘された

が，中世の遺物量は古代のそれと比べて全体的に減少したようにみえる。これを遺跡の減少ととらえるか，それとも腐食しやすい鉄製品や木製品が多かったととらえるかは今後の課題であろう。

近世に入ると全体的に遺物量が増加し，分布もほとんどの部分に広がりをもつようになる。特に余川川・上庄川河口付近，すなわち海岸部における遺跡分布は拡大する傾向にある。しかし，上庄川下流域から河口域の遺跡分布はまばらである。これを事実上の空白ととらえることも可能であるが，市街地と重なっていることもあり，近世都市の多くが現在の市街地と重なることが多いということを考え合わせても，今後の調査で遺構が確認されることは十分考えられる。開発とともにその利用域も拡大したようであり，遺物量は大幅に増加し，その分布もほぼ全域にわたる。

各時代を通した開発の展開はまず縄紋時代に朝日貝塚をはじめとする海岸部においてその利用がみられ，弥生・古墳時代に内陸部への進出がみられるようになり，古代においてこれが顕在化する。中世において海岸部への進出がかなりみられるようになり，低地や河川下流域の開発は近世になって始まるという過程が追える。

以上，遺物量とその分布範囲から考えられる概観を地形と関連させておこなった。この地区では各時代を通して継続的に生活が営まれ，特に，海岸部において遺物が分布する傾向が顕著であった。内陸部においては古代以降にその傾向がみられるようになってくる。本地区は前年度調査した地区とならんで氷見市の歴史的中心地であったことが推察される。しかし，前回同様この地域の歴史を考える資料はまだまだ乏しい。今後，当地域における遺跡の実態が明確になれば，地域の歴史のみならず日本海域の遺跡を考える上でも，重要な意義を持つものと思われる。

（新本真之・前川　要・大野　究）

参　考　文　献

1　宇野隆夫　1989　『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』　真陽社

2　宇野隆夫　1991　『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台にして』　桂書房

3　大橋康二　1989　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

4　大橋康二　西田宏子　1988　『別冊太陽　古伊万里』　平凡社

5　金沢市教育委員会　1989　『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』　金沢市文化財紀要99

6　珠洲市立珠洲焼資料館　1983　『珠洲の名陶』

7　富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1964　『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』氷高歴史クラブ　報告書No.11

8　富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1966　『氷見のお講　朝日水源地遺跡調査報告』氷高歴史クラブ報告書No.12

9　富山大学人文学部考古学研究室　1993　『珠洲大畠窯』

10　楢崎彰一・田中照久　1989　「越前編年表」『北陸における越前陶の諸問題―第２回北陸中世土　器研究会資料―』　北陸中世土器研究会

11　氷見市教育委員会　1989　「氷見市内所在古墳」『脇方横穴群』

12　氷見市教育委員会　1993　「竹里山の岩屋堂」『氷見の指定文化財ハンドブック』

13　氷見市教育委員会　1993　『氷見市遺跡地図』第２版　氷見市埋蔵文化財調査報告書第14冊

14　北陸中世土器研究会　1992　『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

15　増山　仁　1989　「小松式土器の再検討―小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理―」『北陸の考古学Ⅱ』　第32号石川県考古学研究会

16　吉岡康暢　1991　『日本海域の土器・陶磁』[古代編]　六興出版

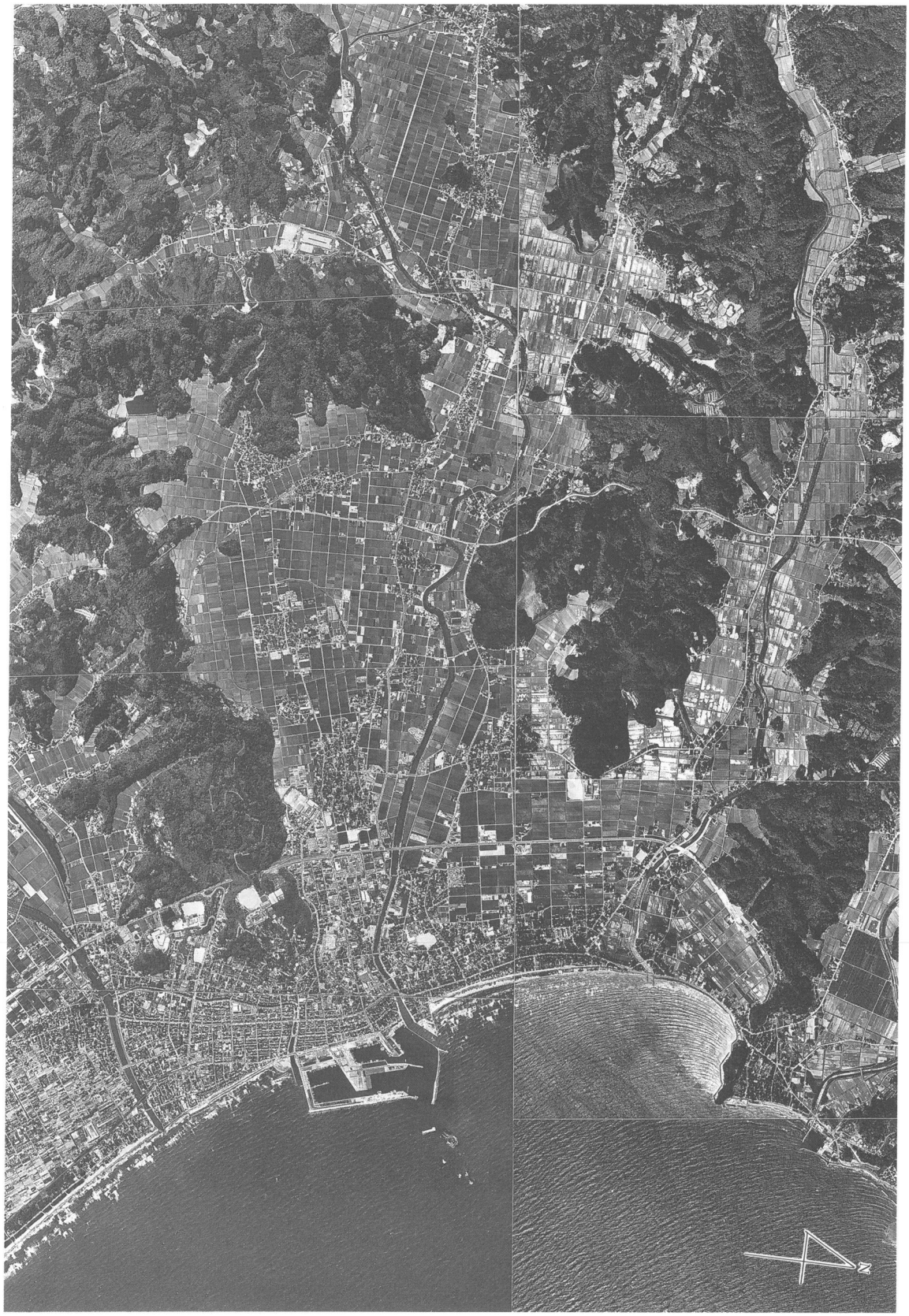
17　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

図　　版

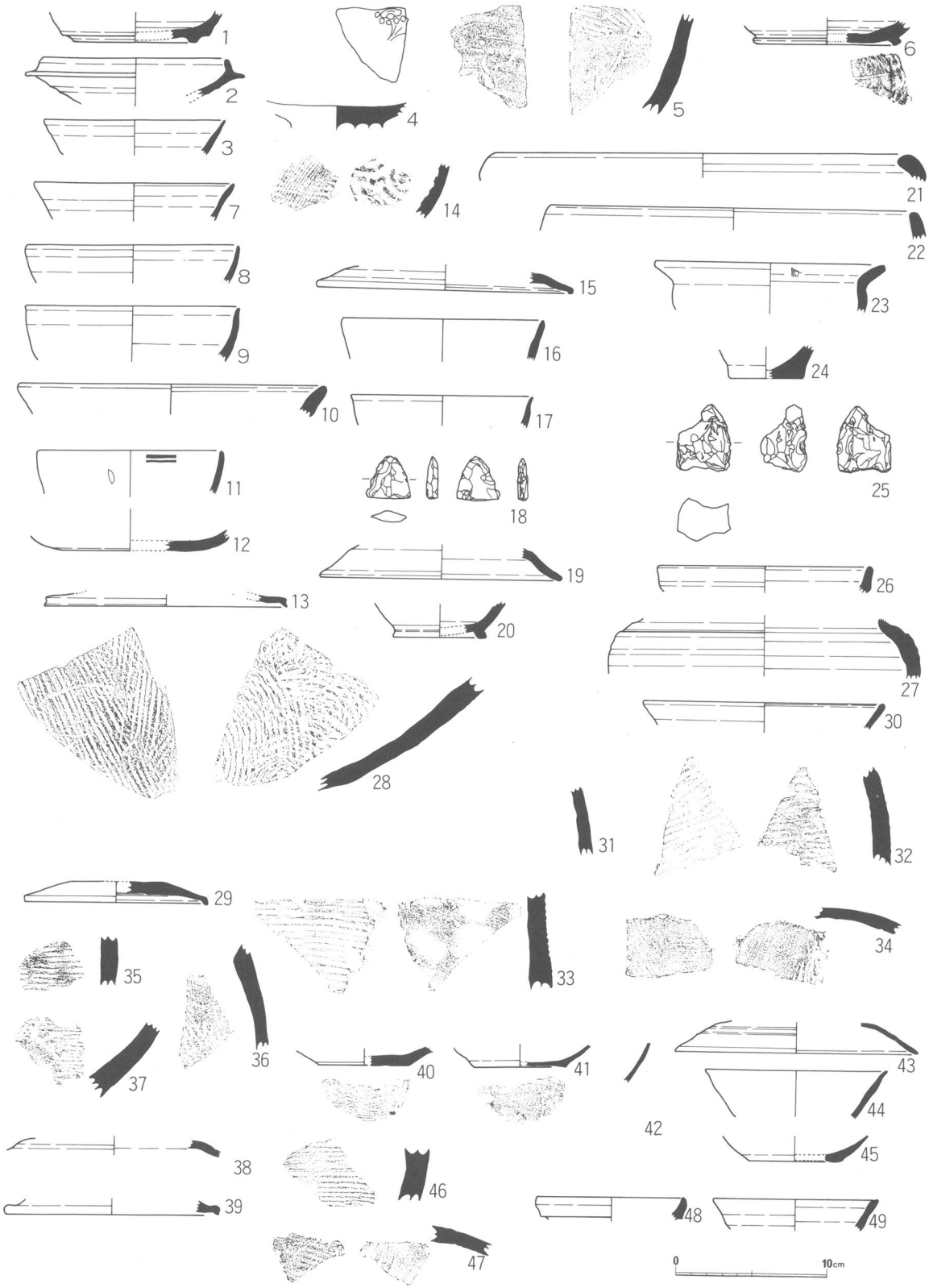
図版一　B地区航空写真（一）

1947年撮影（縮尺1/37,500）

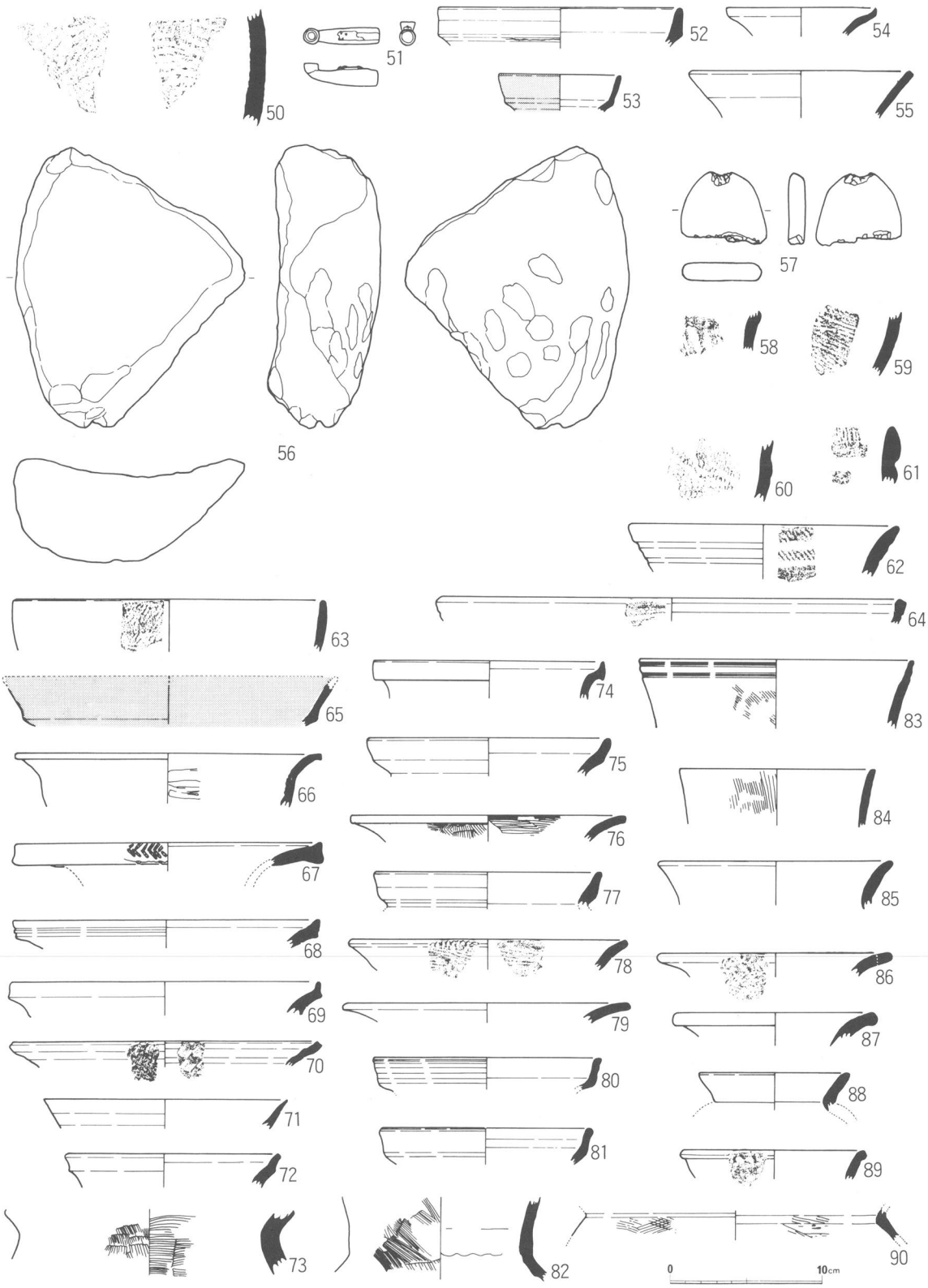
図版二　B地区航空写真（二）



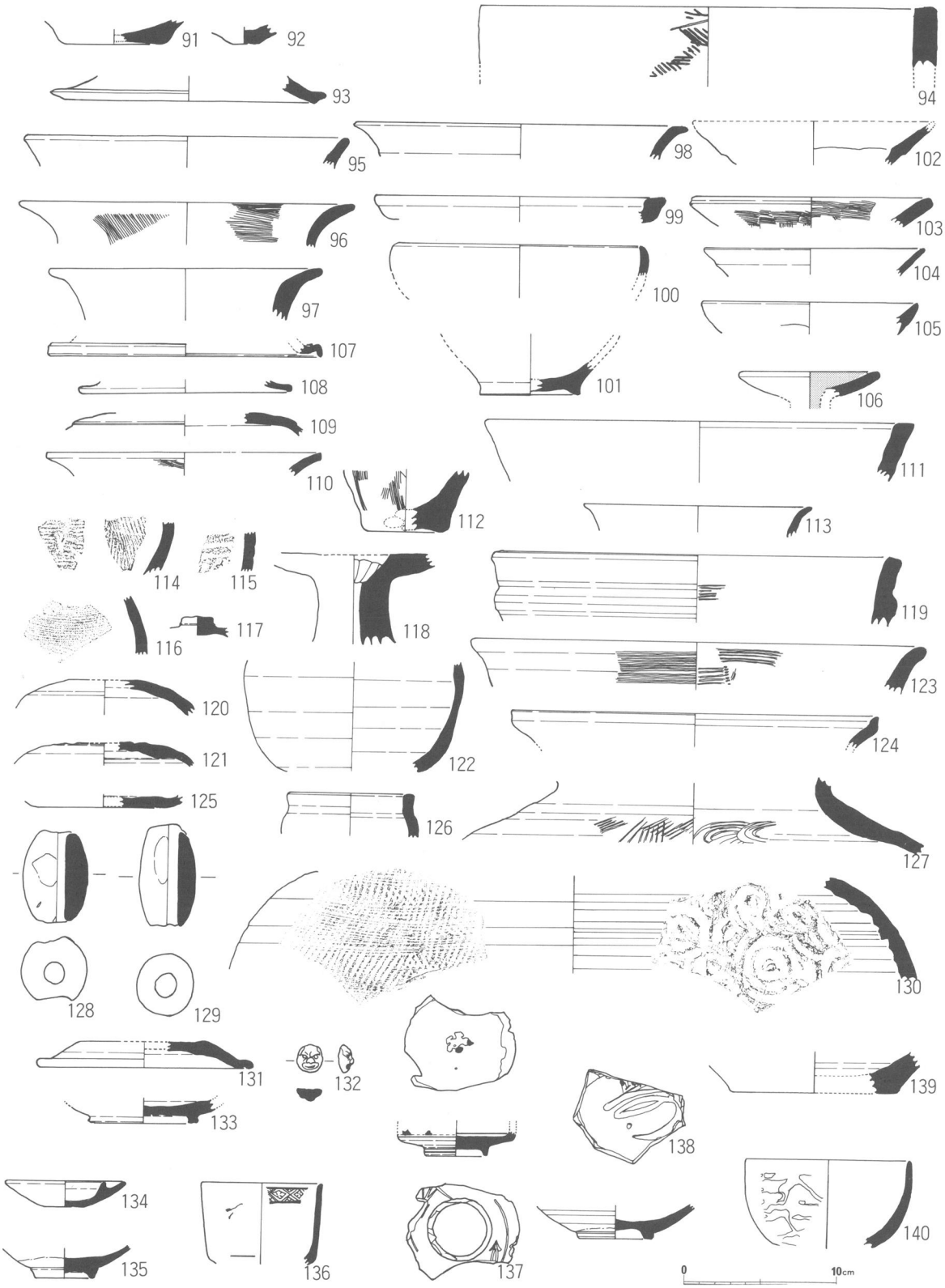
1992年撮影（縮尺1/37,500）



1～2稲積川口遺跡，7～11諏訪野B遺跡，12～13泉横山遺跡，21～25鞍川金谷遺跡，35泉中尾廃寺遺跡，3～4加納金宮遺跡，26～27鞍川D遺跡，35泉中尾廃寺，36～39中尾坊田遺跡，5柿谷大口遺跡，14～18泉C遺跡，28～29上田F遺跡，40～45中尾新保谷内遺跡（縮尺1/4）6七分－B遺跡，19～20大野沢遺跡，30～34大野南遺跡，46～49糖塚南遺跡

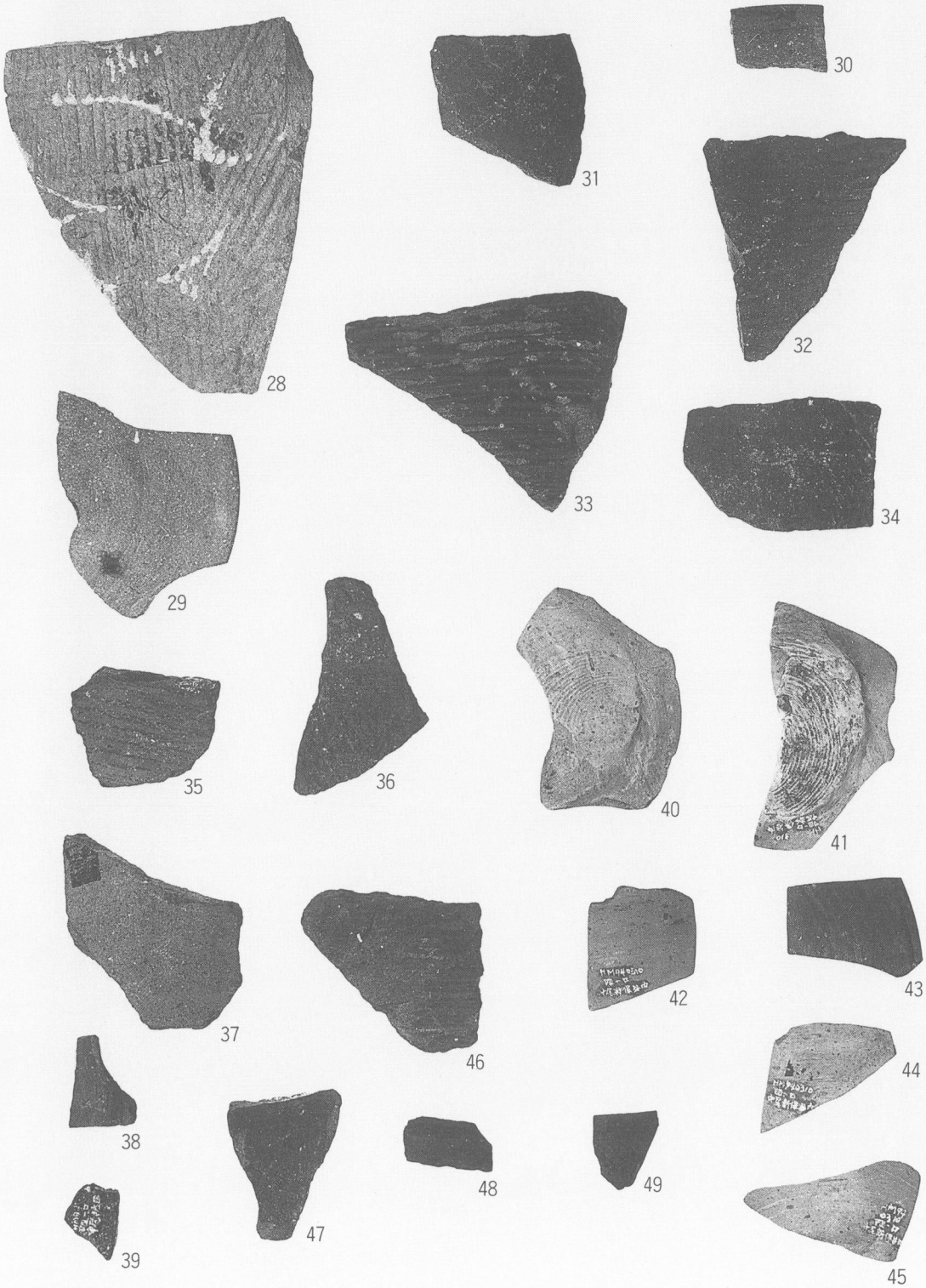


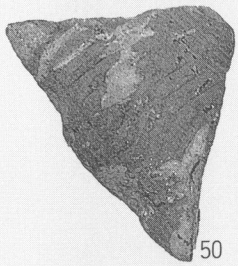
50～51沖布Ｃ遺跡，52～55鞍川横羽毛遺跡，56～90朝日貝塚（縮尺1/4）



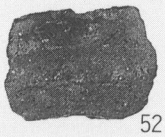
91～111朝日貝塚，112～130岩上遺跡，131中尾山田遺跡，132，134～138・140遺跡範囲外採集品，133大野南遺跡
139七分－B遺跡（縮尺1/4）

図版六　遺物写真（一）


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

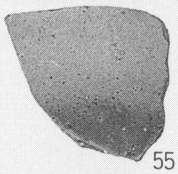

50

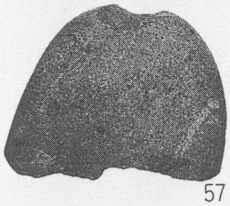
51

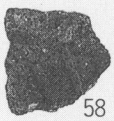

52

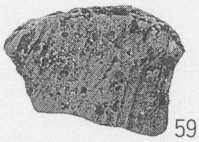
54

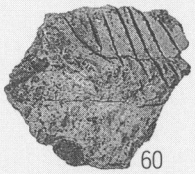
53


55


57

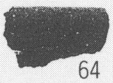

58


59

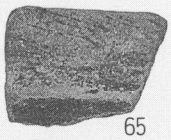

60

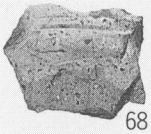
61

63


64

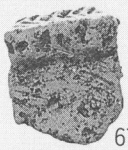
62

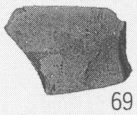

65


68

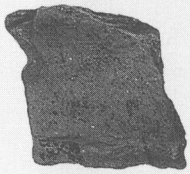
70

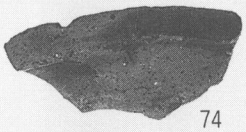
66

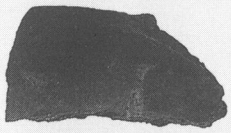

67

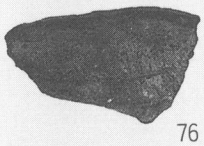

69

72

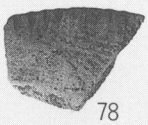

73


74

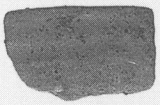

75

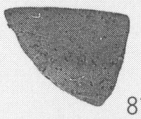

76

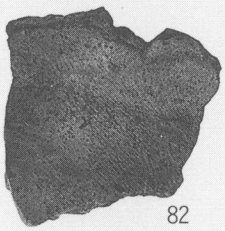
77

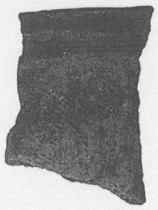

78

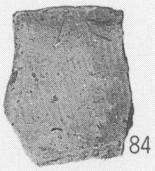
79

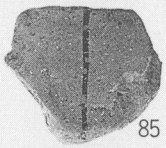

80


81

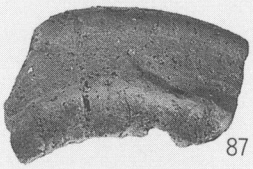

82

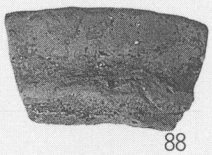

83


84

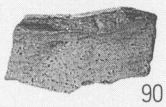

85

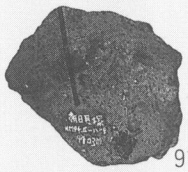
86


87

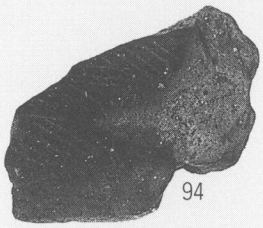

88

89

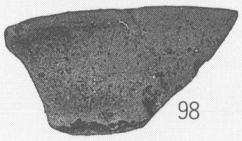

90

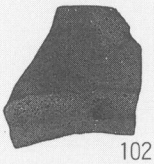

91

92


94

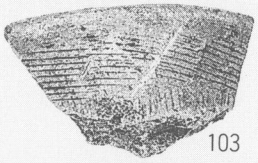
93

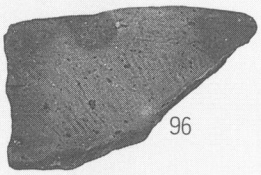

98

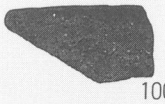

102

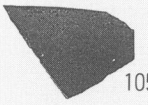
95

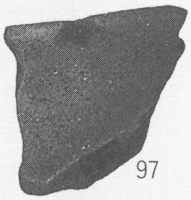
99

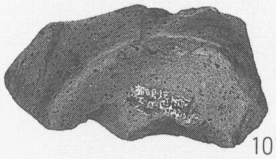

103

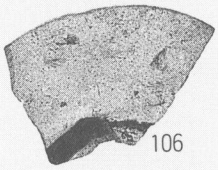

96


100

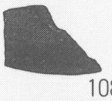

105

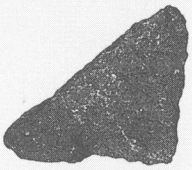

97

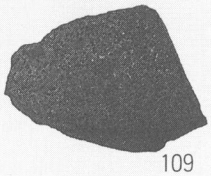

101


106

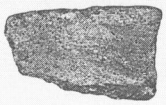
107

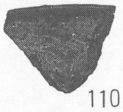

108

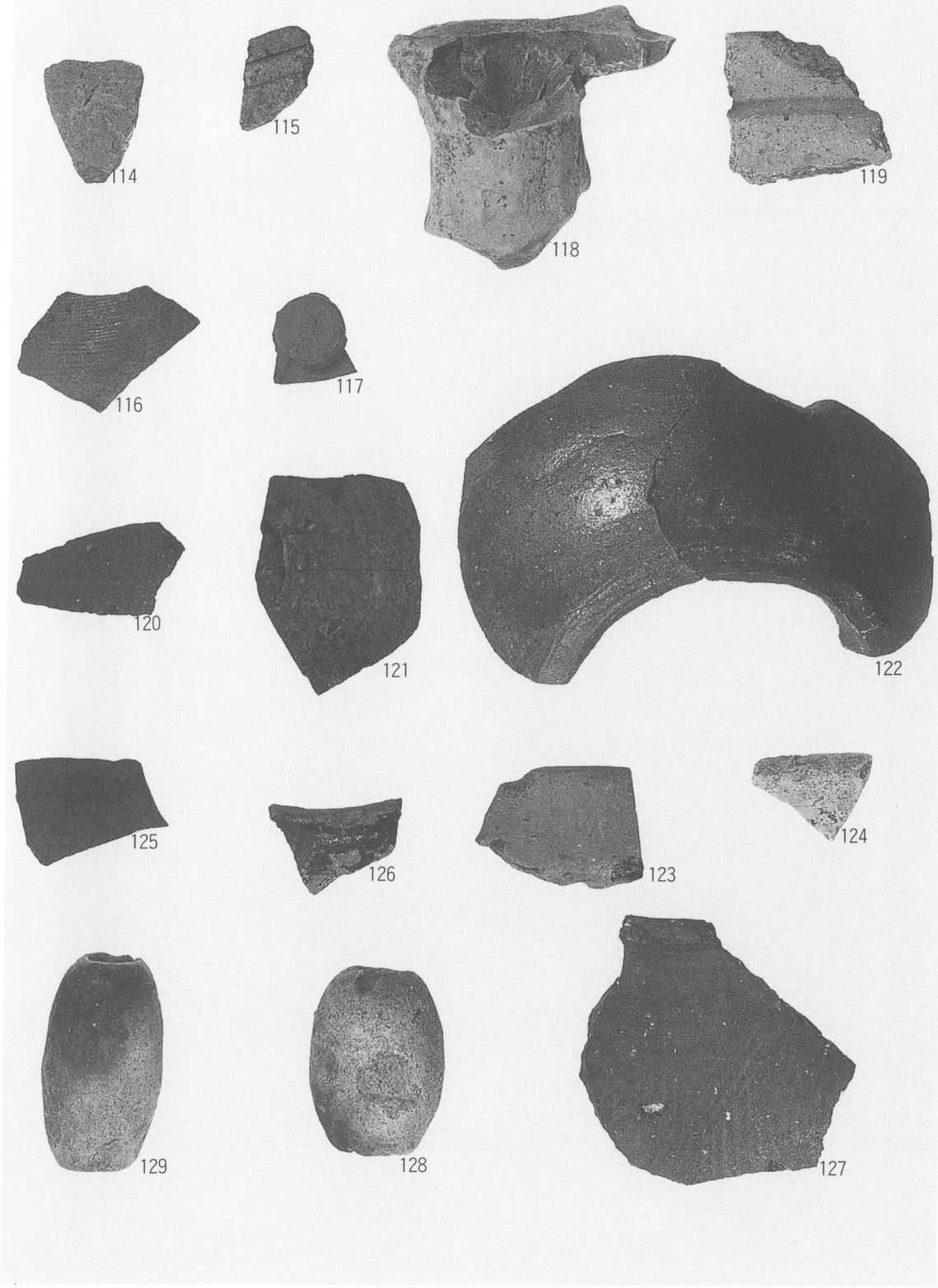

111

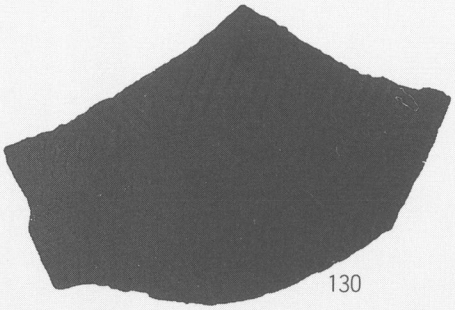

109

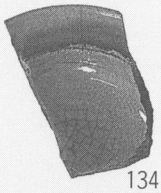
112

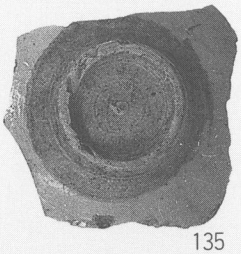

113

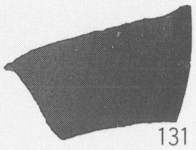

110


114
115
118
119
116
117
120
121
122
125
126
123
124
129
128
127

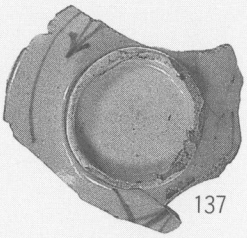

130

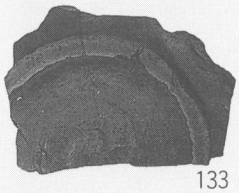

134

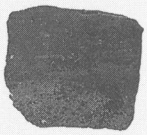

135

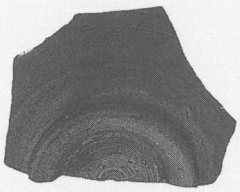

131

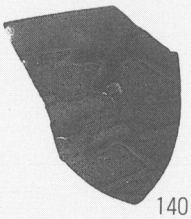
136


137


133


139


138


140

56

図版一三　B地区の遺跡と遺物採集地点（I）

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

1 稲積川口遺跡
3 木谷城
4 加納蛭子山古墳群（古墳時代）
5 加納横穴群（古墳時代）
6 稲積三ツ屋前遺跡（古代）
7 稲積三屋野遺跡（古代～中世）
8 加納金宮遺跡
14加納桜打遺跡
15諏訪野Ｂ遺跡（中世）
16諏訪野Ａ遺跡（古代）
17唐島遺跡（中世～近世）

図版一四　B地区の遺跡と遺物採集地点(II)

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

2 高塚遺跡
3 木谷城
9 柿谷大口遺跡(中世)
10柿谷土谷山古墳群(古墳時代)
11七分一遺跡(古墳時代)
12七分一B遺跡(古代～中世)
13加納中程経塚
18泉横山遺跡(古代～近世)
19領毛A遺跡(縄紋～古墳)
20領毛B遺跡(古墳時代)
21泉古墳群

図版一五　B地区の遺跡と遺物採集地点(Ⅲ)

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

21泉古墳群(古墳時代)
22泉A遺跡(古代)
23泉C遺跡(縄紋～近世)
24泉B遺跡(古代～中世)
25大野沢遺跡(縄紋～古代)
37上田A遺跡(古代)
38上田F遺跡(古代～近世)
39上田B遺跡
40千久里城
42大野南遺跡
43泉中尾廃寺(弥生～近世)
44中尾坊田遺跡(古代～近世)
45中尾新保谷遺跡(古代～近世)
46沖布B遺跡(古代)
47糖塚南遺跡(縄紋～近世)
48沖布C遺跡(古代～近世)
49沖布A遺跡(弥生～古代)
62中尾ガメ山遺跡(中世)
63中尾山田遺跡(古代)
64中尾横穴群(古墳時代)
65荒館A遺跡

図版一六　B地区の遺跡と遺物採集地点(Ⅳ)

△：縄紋時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
○：中世遺物採集地点
●：近世遺物採集地点

26鞍川金谷遺跡(縄紋～古墳)
27鞍川A中世墓(中世)
28鞍川D遺跡(古代～近世)
29鞍川C遺跡(中世)
30鞍川諏訪社(中世)
31鞍川B中世墓(中世)
32鞍川寺田遺跡(縄紋時代)
33朝日山砦(中世)
34七軒町遺跡(縄紋時代)
35蓮乗寺中世墓群(中世)
36比美浜遺跡
49沖布A遺跡(弥生～古代)
50鞍川横羽毛跡(弥生・近世)
51朝日谷内横穴(古墳時代)
52上時中世墓群(中世)
53朝日長山古墳(古墳時代)
54朝日水源池遺跡(縄紋時代)
55朝日十字路遺跡(中世)
56朝日貝塚(縄紋～近世)
57朝日潟山古墳群(古墳時代)
58朝日橋詰遺跡(中世)
59御座町遺跡
60岩上遺跡(縄紋～中世)
61伊勢王神社中世墓群(中世)

1995年３月25日　印刷
1995年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ
氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊

編集・発行　氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

印　刷　ヨシダ印刷株式会社